

高槻市文化財調査概要 X

鳴上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・10



1986

高槻市教育委員会

はしがき

島上郡衙跡にかかる発掘調査事業は、本市の直営事業として実施して以来、10年を経過いたしました。市立埋蔵文化財調査センターが開館し、調査事業が継続的におこなわれ、年毎に貴重な成果を得て、郡衙中枢域の様相を十分とはいえないとしても、想定にたる重要な遺構・遺物を検出しております。特に、昨年は郡衙郡庁院の規模ならびに位置までも推定しうる遺構・遺物を検出し、今後、同史跡の保存・整備をおこなううえで、貴重な資料となりました。

今年度に実施した調査においても重要な成果を取ることができました。中でも史跡指定地の周辺において実施した調査では、郡衙中枢域の北東にあたる地区から、郡衙成立前の古墳時代前期の良好な竪穴式住居や布留式土器の一括資料が発見されております。これまで数多くの資料の中でも、これらの遺物は、阿久刀神社周辺での調査とも関連して、島上郡衙を考える上でも重要な資料といえるものであります。現在も調査中でありますので、整理が完了した段階でその全容を報告したいと考えております。

一方、本市の都市基盤の整備として実施しております各種事業に関わる調査においても貴重な成果がみられます。芥川廃寺周辺での調査では、同廃寺関係に関わると考えられる遺構を検出し、今後の調査に期するものが大いにあると考えられます。特に、南西方での調査では、建物跡を検出、同廃寺の僧房もしくは、関連遺構の配置について新たな知見が加えられました。

また、宮田遺跡では、島上郡衙衰退後の遺構の検出が予測されましたが、調査では、弥生時代の遺構が検出され、郡衙成立前における芥川西岸地域の様相を考えるのに新たな知見を得ました。今後、島上郡衙を考えるうえで貴重な資料になるものであります。

ここに本年度の発掘調査の結果をまとめ、報告させていただくとともに、多くの方々のご教示をあおぎ、調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝する次第であります。

昭和61年3月31日

高槻市教育委員会

社会教育課長 西阪 弘

例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が国庫補助事業（総額10,000,000円）として計画し、調査を実施した高槻市所在の史跡・嶋上郡衙跡周辺部及び郡衙関連遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、高槻市教育委員会・市立埋蔵文化財調査センター所長富成哲也の指導のもと、技術吏員大船孝弘・橋本久和・森田克行らが担当し、大阪府教育委員会の助力を得て、昭和61年3月31日事業を終了した。
3. 本書の作成にあたっては、調査担当者の責でもっておこない、出土遺物の作図・トレースについては、宮崎康雄氏によるものその他、遺物整理については恵谷英俊・武村雅一・後藤勇子・白銀良子の各氏の援助をうけた。記して感謝の意を表わします。
4. 調査の実施にあたり、並川真・足立章・土井利男・服部恒・大塚義男・宮川和行・森田将弘・津田憲政・中森稔・阪上弘・香月不二夫・上野亀治郎・小畠悦子・土代啓子・高谷定生の各氏の援助をうけた。また本市文化財保護審議会委員原口正三氏には、調査全般についてご指導いただきました。記して感謝の意を表わします。
5. 史跡・今城塚古墳確認調査にともなう花粉分析については、大阪府立三島高校教諭・徳丸始朗氏によるものである。

目 次

I 鳥上郡衙跡	1
II 郡家本町遺跡	12
III 宮田遺跡	14
IV 富田遺跡	15
V 塚脇古墳群	16
VI 史跡今城塚古墳の花粉分析	18
■ まとめ	22

No	地区(遺跡名)	調査地	面積(m ²)	申請者
1	5-B地区	郡家本町20-1, 969-1	264.89	並川 真
2	85-M地区	今城町186-6	64.55	足立 章
3	67-K地区	川西町1丁目1087-18	54.40	土井 利男
4	5-J・K地区	郡家本町751-3, 752-2・5	643.02	服部 恒
5	55-I・M地区	郡家新町245	538.18	大塚 義男
6	48-B地区	川西町1丁目956-4	53.14	宮川 和行
7	48-C地区	川西町1丁目954-16・17	118.13	森田 将弘
8	4-C・D・G・H地区	郡家本町944	313.00	津田 薫政
9	44-D・H, 45-A・E地区	郡家新町356	1,117.17	中森 稔
10	17-F・G・J地区	清福寺町807-1	996.76	阪上 弘
11	郡家本町遺跡	郡家本町1000-18	634.00	香月 不二夫
12	宮田遺跡	宮田町3丁目38-1	436.00	上野 龜治郎
13	"	宮田町3丁目43, 44	1,040.00	小畠 悅子
14	富田遺跡	富田町4丁目488-6	198.35	土代 啓子
15	塚脇7号墳	塚脇1丁目321-1	224.00	高谷 定生

表1 鳥上郡衙跡他関連遺跡調査地一覧

嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要

I 嶋上郡衙跡

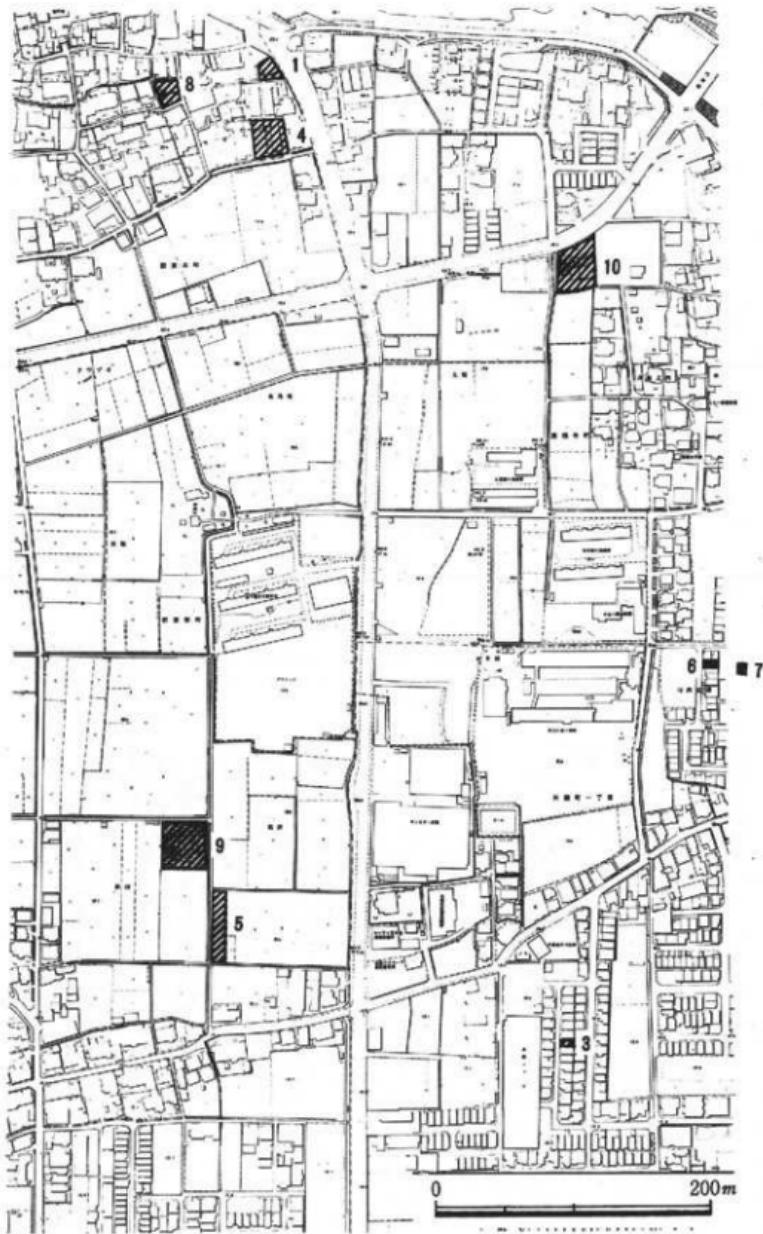
1. 5-B 地区の調査

高槻市郡家本町 20-1、961-1 番地にあたり、小字名は東垣内と称する。現状は宅地である。このたび、個人住宅を新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北辺部に位置し、式内社・阿久刀神社の西側約 150 m にあたる。調査は、遺構の分布が希薄な地域であることから、申請地の北側に東西 2.5 m、南北 1.5 m のトレンチと、南側に東西 7 m、南北 2 m のトレンチを 2ヶ所設けておこなった。北側トレンチの層序は、盛土 (0.1 m)、暗灰色土層 (0.3 m)、黄褐色礫土層〔地山〕であり、トレンチ内からは、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。南側トレンチの層序は、盛土 (0.3 ~ 1.5 m)、黒色土層 (0.05 m)、暗灰色土層 (0.3 ~ 0.6 m)〔遺物包含層〕、黄土色礫土層〔地山〕である。調査の結果、トレンチ内からは柱穴 11ヶ所、溝 1 条が重複して検出された。遺構の埋土はいずれも黒灰色土層であり、柱穴から奈良時代に属する土師器・須恵器片が若干出土した。また、遺物包含層中からは弥生時代から歴史時代までの土器片が若干出土しているが、いずれも細片であって、時期・器形等については不明である。今回検出した柱穴群は、奈良時代の住居址に伴うものと考えられるが、調査範囲も狹少なことから、建物の規模・柱通り等については明確にすることができなかった。(大船)



挿図 1 嶋上郡衙跡空中写真



挿図 2 島上郡衙跡の調査位置図

2. 85-M地区の調査

高槻市今城町186-6番地にあたり、小字名は中久保と称する。現状は宅地である。このたび、個人住宅を新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南西端に位置し、遺構・遺物の希薄な地域である。調査はまず遺構の確認および層序を観察するために、申請地の南側に2m角のトレンチを設け、重機（ユンボ）を使用して地山面まで掘り下げておこなった。層序は盛土（1.6m）、耕土（0.3m）、床土（0.1m）、暗褐色粘土層（0.05m）、暗灰色土層（0.3m）、灰黃褐色粘土層（地山）である。調査の結果、トレンチ内では遺構・遺物をまったく検出することができなかった。（大船）

3. 67-K地区の調査

高槻市川西町1丁目1087-18番地にあたり、小字名は千原橋と称する。現状は宅地である。このたび、個人住宅を新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南東部に位置し、西国街道（旧山陽道）よりさらに南側約100mのところにあたる。調査はまず遺構の確認および層序の観察をするために、申請地の北西部に2m角のトレンチを設け、重機（ユンボ）を使用して地山面まで掘り下げておこなった。層序は盛土（1.1m）、耕土（0.15m）、床土（0.15m）、暗褐色粘土層（0.15m）〔遺物包含層〕、黄褐色粘土層（地山）である。調査の結果、遺物包含層から弥生土器の細片が数点出土したが、遺構はトレンチが狭小なこともあって検出することができなかった。弥生土器はいずれも細片であって、時期および器形等については不明である。（大船）

4. 5-J・K地区の調査

高槻市郡家本町751-3番地にあたり、小字名は東垣内と称する。現状は宅地である。このたび、アパートを新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北部に位置し、式内社・阿久刀神社の西側約150mにあたる。調査は、



插図3 島上郡衙跡の調査位置図

遺構の分布が濃密な地域であることから、申請地を南側と北側に2分割し、排土を反転しておこなった。基本的な層序は、盛土（0.4m）、耕土（0.2m）、床土（0.2m）、灰褐色土層（0.2～0.4m）〔整地層〕、暗褐色土層（0.3m）〔遺物包含層〕で、その下は黄褐色土層～礫層の地山になる。地山面の標高は、北端で19.9m、南端で19.2mを測り、南側に向って緩やかな傾斜した地形を呈している。

遺構（図版第3～5・38）

検出した遺構は、溝4条、土壙4基、落ち込み2ヶ所、井戸1基と柱穴多数があり、調査区のはば全域にわたって認められた。特に今回の調査地は、峰上郡衙跡の範囲の中でも住居地に近いこと也有て、各時期の遺構が重複して同一地山面で検出された。

溝1は、調査区の北東部から南西方向に少し蛇行して流れる東西溝である。規模は幅1.6～2.2m、深さ0.6～0.8mを測り、断面はV字形を呈する。埋土は上層が灰褐色土層、中層が黄褐色土層、下層が黄灰色粘土層で3層に分けられる。遺物は中・下層より弥生時代後期の土器片が少量出土した他、縄文時代の石鎌1点がある。上層からは弥生～中世までの土器片が混在した状況で出土した。溝2は、北東部に位置する東西溝である。規模は長さ3.9m、幅0.6m、深さ0.15mを測る。埋土は暗褐色土層であり、弥生土器・須恵器片が若干出土した。溝3は、中央部西側に位置する東西溝で、溝1によって西側を切られている。規模は幅0.6m、深さ0.15mを測る。埋土は暗褐色土層であり、弥生時代後期の土器片が少量出土した。溝4は、南西部に位置する南北溝である。規模は幅0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰色粘質土層であり、出土遺物は認められなかった。土壙1は北西部に位置し、平面形は不定形な方形を呈する。規模は長辺1.9m、短辺1.5m、深さ0.1mを測り、断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰色土層であり、土壙の南西部には荒い石敷が認められる。遺物は、弥生土器・須恵器・瓦器片が少量出土した。土壙2は、中央部東側に位置し、平面形は長方形を呈する。規模は長辺2.5m、短辺1.5m、深さ0.05mを測り、断面は浅い皿状を呈する。埋土は炭粒を多く含んだ暗灰色土層であり、瓦器・土師器片が少量出土した。土壙3は、中央部に位置し、平面形は長方形を呈する。規模は長辺2.1m、短辺1.5m、深さ0.1mを測り、断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗青灰色粘質土層であり、遺物は認められなかった。土壙4は北東部に位置し、平面形は不整形な階円形を呈しているが、東側は調査区外にあるため、詳細については不明である。規模は幅1.2m、深さ0.1mを測り、断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰褐色土層であり、弥生土器・須恵器片が少量出土した。落ち込み1は中央部に位置し、規模は幅3.8m、長さ4.5m、深さ0.3mを測る。北側は石組井戸の掘り方によって擾乱をうけており、断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰褐色土層であり、弥生土器・須恵器・土師器片が少量出土した。時期は出土遺物などから奈良時代のものと考えられる。落ち込み2は中央部南側に位置し、平面形はL字状を呈するが、南側の大部分は調査区外にあるため、詳細については不明である。規模は幅4.5m、長さ6m、深さ0.25mを測り、断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗青灰色粘質土層であり、須恵器・土師器・陶磁器・フィゴの羽口片等が出土した。時期は中世に属するもので、石組井戸の南側に位置することから排水池のようなものであろう。井戸は調査区の中央部よりやや北側に位置し、人頭大ないしそれよりやや小さめの河原石で構築された円形の石組のものである。内径は上辺が

径1.2m、底部が径1.1mを測り、現存する深さは2.1mである。掘り方の上辺径は2.7mを測る。埋土は暗灰色粘土層であり、その中に多数の河原石が含まれていた。遺物は、上層の埋土から弥生土器・須恵器・陶磁器・瓦質土器・瓦片等が若干出土した。また底部からは庖丁・鎌などの金属製品・櫛・曲物などの木製品の他、土師器皿などが少數出土した。時期は土師器皿の編年観などから16世紀頃であろう。柱穴は調査区のほぼ全域から、重複するように検出された。規模は径0.2~0.3mの小形円形のものと、一辺約0.5mの方形の2種類のものがある。時期的には弥生時代後期から中世のものが混在しているのであるが、方形で大型のものを除いて、時期別に柱穴を抽出することは困難であった。また、建物の配置等についても、柱穴の形状や深さなどによって復元を試みたが、成果をあげることができなかった。特に方形の柱穴が集中する北西部、井戸の東側、南西部の3ヶ所には、奈良時代の建物跡の存在が推測されるが、調査範囲が狹少なこともあって、明確な建物を検出することができなかった。

遺物(図版第6~12・44~47)

上述したように、本調査区においては、弥生時代から中世に至る遺構を検出し、それに伴って各時代の遺物が出土している。また、包含層や敷地層からも、土器を中心とする遺物が多数出土している。以下、各時代ごとに概略的に述べていくことにする。

(1) 弥生時代の遺物

この時期の遺物は、溝1と溝3、そして包含層から出土した土器類である。時期は多少の年代幅があるが、弥生時代後期でも後半のものが大部分である。1は溝3から出土した壺で、完形に復元された数少ないものである。頸部は上方にたちあがり口縁部で大きく外反している。口縁端部は上下にわずかに突出し、細凹線を有する。体部は円球形を呈し、最大腹径は中位にある。内面はナデ調整がおこなわれており、外面はハケ調整後、丁寧なヘラ磨きが施されている。底部は突出し、平滑にナデしている。また中心部は若干凹んでいる。色調は黄赤褐色。2は溝1から出土した壺の口縁部である。頸部は上方にたちあがり、口縁部で外反する。口縁端部は下にわずかに突出する。内外面とも横ナデ調整によって仕上げている。色調は赤褐色。3は溝1から出土した直口壺の口縁部である。口縁部は短くわずかに外反してたちあがっており、内外面はハケ調整によって仕上げている。色調は黄褐色。4は包含層から出土した壺の体部である。体部は肩の張った扁平な形を呈しており、内面はハケ調整がおこなわれ、外面は丁寧なヘラ磨きが施されている。底部は突出し、周囲を平滑にナデしている。また中心部は若干凹んでいる。色調は灰褐色。5は溝1の中層から出土した有孔鉢である。体部は小さな平底から斜め上方にのびており、外面はナデ調整によって仕上げられている。口縁端部はわずかに面をもっている。色調は黄褐色。6は包含層から出土した壺である。底部は欠失する。体部は縦長の球形を呈し、外面は叩き目整形後上方を丁寧にナデしており、内面はナデ調整によって仕上げている。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめている。色調は灰褐色。7は溝1から出土した壺の底部である。底部は突出ぎみの平底を呈し、中央部は若干凹んでいる。内外面はナデ調整によって仕上げられている。つぎに、破片で出土した土器について簡単に触れておく。壺は頸部に凸帯をめぐらすもの(35)や、凹縁の上に円形浮文と棒浮文を飾ったもの(36)がある。高杯では小型高杯の脚部(38)、脚部にヘラ記号を有するもの(39)などがある。壺の口

縁には、端部に細い凹線を施すもの（42・43）と施さないもの（44）がある。底部は木葉痕があるもの（46）やヘラ記号を有するもの（47）がある。また胎土などから41は生駒西麓産のものと考えられる。有孔鉢は外面を叩き整形のままにしたもの（48・50）と、ナデ調整によって仕上げたもの（48）がある。

（2）古墳時代の遺物

この時期の遺物は、ほとんどが包含層と溝1から出土した須恵器・土師器片である。出土した遺物は大部分は小さな破片であって、完形品に復元できたものは少ない。須恵器の器種としては、蓋杯・高杯・器・脚付直口壺・器台・壺・甕などがある。包含層から出土した蓋杯は、5世紀後半から7世紀中頃までの各時期のものが認められる。杯蓋は天井部と口縁部の間に稜線を残すもの（9・10）と、天井部がゆるやかにカーブする新しい時期のものに大きくわけられる。新しい時期の杯蓋は、天井部の回転ヘラ削りがほとんど $\frac{1}{2}$ までしか施されていない。特に17はヘラ切り後、天井部の回転ヘラ削り調整はおこなわれていない。杯身（18）は、受部の立ち上りがそれほど高くないがしっかりしており、底部の回転ヘラ削りも $\frac{1}{2}$ まで施されている。高杯にはスカシ窓を配するもの（61・62）と配さないもの（63）がある。その他特徴あるものとしては、小型甕の口縁部にヘラ記号を残したもの（60・71）がある。土師器としては小型の深鉢（8）と把手付の甕（20）がわずかにある。

（3）奈良時代の遺物

この時期の遺物は非常に少なく、落ち込み1と溝3から出土した土師器片が若干ある。杯はこの時期の特徴的な赤褐色の胎土のもの（74・78）と、灰褐色のもの（73・74）の2種類がある。その他の器種としては、壠（76・77）と高杯（79）と甕（80）がある。81は外面に縦ハケを施した厚手の土器片で、内面には粘土紐の接合痕が顕著に認められる。胎土は砂粒を多く含むことなどから、製塙土器の可能性が考えられる。

（4）中世の遺物

この時期の遺物は、井戸・落ち込み2・柱穴などから出土した多種多様なものがある。21～26の土師器皿は井戸の底部から一括して出土したものである。皿は手挽による小型のもの（21）と、径10cm前後のもの（21～24）、径16cm前後のもの（25・26）がある。時期は土師器皿の編年観などから16世紀頃のものであろう。27～29は柱穴から出土した小型の手挽による土師器皿である。時期は井戸の出土資料よりも古い時期のものであろう。30は調査区北側の柱穴から出土した桶型の瓦器碗である。その他の遺物としては、中国製磁器（82～86）、須恵器片口鉢（91）、土師器甕（90）、土師器羽釜（95）、瓦器壠（92）、瓦器羽釜（93・94）、瓦器皿（89）、陶器壠（96・100）、備前焼掃鉢（99・101・103）、瓦器火鉢（102）、須恵器甕（104）などがある。井戸の埋土中からは平瓦片が数点出土している。105は古代の瓦片で凹面に布目と凸面に繩の叩き目を残すものである。106～108は凸面に炭素の吸着が認められる。時期は瓦当文などが検出されていないため明確でないが、14世紀頃のものと推測される。また、井戸の底部からは、ツケ製の小型壠（110）1点、曲物の底板（115）1点が出土している。これらはいずれも本体や柄の部分が破損したものばかりで、使用可能なものは認められなかった。そこで考えられることは、井戸を埋め戻す際に、不用になっ

た道具を投げ込んだ可能性が高いと考えられる。(大船)

5. 55-L・P地区の調査

高槻市郡家新町 245 番地にあたり、小字名は高津である。現状は水田で、今回宅地造成工事が計画されたため発掘調査を実施した。

当調査区は、神都社の約 200 m 南に位置し、小字名から郡衙の中権機構が存在したのではと推定されたこともあった。これまでの調査では、52 年度に実施した 55-L・P 地区で、山陽道とほぼ平行する濠状遺構(溝 3)が検出されている。この 55-L・P 地区と今回の調査区は約 70m しか離れておらず、濠状遺構とした溝 3 の延長部分が検出されるものと思われた。

遺構(図版第 13・14・40)

層序は耕土(0.2 m)、黄褐色土(0.1~0.2 m)と堆積し、地山は黄灰色砂質粘土である。床土は調査区北側で 0.05~0.1 m 堆積しているだけである。

調査区中央から北側にかけて、55-L・P 地区の濠状遺構と繋がる溝(溝 2)と、耕土下から掘込まれた小溝(溝 1)が検出された。また、調査区南側で不定形の土壤が検出された。

溝 1 は幅 0.8~1.0 m、深さは耕土下から測ると約 0.5 m であるが、地山面では 0.1 m である。

溝 2 は地山面に掘削され、幅 2.5~3 m、深さ 0.6 m を測る。底部が緩やかな V 字形をなし、溝内には灰褐色粘土(0.4 m)、暗灰色粘土(0.1 m)、灰色砂層(0.1 m)が堆積している。この溝 2 は、55-L・P 地区の濠状遺構の延長と合致し、現存の条里南北軸に対して 78~79 度の傾きがある。調査区の西隅で、北方へ屈折している。この屈折点の肩部内側は約 80 度を測り、現存条里の南北軸とはほぼ合致する。溝幅は調査区北端で 1.7 m を測った。深さは 0.2~0.25 m で、肩部から溝底にかけて緩やかに掘削されている。

溝 1・2 とも溝内から埴輪・須恵器の破片が出土している。

不定形の土壤 1 は、深さ 0.1~0.2 m を測る。埋土から瓦器の破片が出ているので、中世以降に掘削されたと思われる。他に、柱穴などはまったく検出されなかった。

遺物(図版第 14-b~15・48)

溝 1(1・2)、溝 2(3・4) から埴輪破片が検出されている。主に円筒埴輪で、縦方向のハケ目が施され、円形の透し穴が設けられたものもある(4・8)。11 は朝顔形埴輪の破片とみられ、ヘラ先で文様が彫かれている。

溝 2 からは奈良時代の須恵器、土師器、瓦も出土している。須恵器には壺(13・14)、甕(15)、蓋(16)があり、甕(12)は古墳時代に属するものである。瓦(6・7)は、内面に細かい布目が残る平瓦である。土師器は杯(22)、甕(23~25)、羽釜(26)がある。

土壤 1 からは瓦器陶(27・28)が出土している他、白磁碗(30)、灰釉陶器壺(31)の破片も出土している。他に、小形の翼状剥片(図版第 49-9)や剥片(10・11)、削器(12)が出土している。12 は白色の溶結凝灰岩である。

今回の調査では予想したように、55-L・P 地区の濠状遺構の延長部分が確認でき、北へ屈折していることが判明した。この溝 2 は、出土遺物からみて奈良時代中頃とみられ、東西方向はついね

いに掘削されているが、南北方向は省略気味である。山陽道ともほぼ並行であるところから、郡衙関連施設のひとつと考えられるが、どのような性格を有したのか現段階では判らない。(橋本)

6. 48-B 地区の調査

高槻市川西町1丁目956番地の4にあたり、小字名は川西北浦である。当調査地は、川西小学校の東側住宅地であり、従来の調査では、弥生時代の方形周溝墓等が検出されている。

今回、個人住宅建設に先立って発掘調査を実施した。調査地は狭小なため、小型ユンボを使用し、幅2m×長さ3mの調査域を設定した。

層序は盛土(1m)、耕土(0.14m)、黄色土(0.2m)、褐色土(0.4m)と堆積し、地山は黄褐色土である。褐色土層内に、土師器・須恵器の細片がみられただけで、地山面での遺構は確認できなかった。

今回の調査は、調査区が狭小なため、遺構・遺物の検出はできなかったが、比較的厚く堆積する褐色土の状況からみて、方形周溝墓を中心とする弥生時代の遺構群の一画とみられる。(橋本)

7. 48-C 地区の調査

高槻市川西町1丁目954-16・17番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。このたび、個人住宅の新築工事に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の東端に位置し、遺構・遺物の分布が希薄な地域である。調査は申請地の南側に2m角のトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。層序は盛土(1.1m)、耕土(0.2m)、床土(0.1m)、暗褐色土層(0.4m)、暗褐色土層(0.5m)〔遺物包含層〕、暗褐色含礫土層〔地山〕である。調査の結果、トレンチ内からは遺構を検出することができなかったが、遺物包含層中から弥生土器片が数点出土した。土器片はいずれも細片であって、時期・器種等については不明である。(大船)

8. 4-C・D・G・H地区の調査

高槻市郡家本町944番地にあたり、小字名は東堀内と称する。現状は宅地である。このたび、個人住宅の新築工事に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北西端に位置し、郡家本町遺跡とすぐ西側で接するところにあたる。調査は遺構・遺物の分布が希薄な地域であるため、申請地の西・北・東側の3ヶ所に2m角のトレンチを設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。東側中央部に設けたトレンチ1の層序は、盛土(0.2m)、赤黄色土層(0.05m)、暗褐色含礫土層(0.15m)、黄褐色土層〔地山〕である。北側中央部に設けたトレンチ2の層序は、盛土(0.3m)、赤黄色土層(0.05m)、褐色土層(0.05m)、暗茶褐色土層(0.2m)、暗褐色土層〔地山〕である。南西部に設けたトレンチ3では、新しい井戸の掘り方によって搅乱されており、層序を観察することができなかった。調査の結果、ト

レンチ1・2からは遺構を検出することができなかったが、レンチ1の暗褐色含礫土層中から土師器片が3点出土した。土師器片はいずれも細片であって、器形等は明確でないが、胎土などから歴史時代のものと考えられる。（大船）

9. 44-D・H、45-A・E地区の調査

高槻市郡家新町356番地にあたり、小字名は林田と称する。現状は水田である。このたび、宅地を造成する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の中央部西側に位置し、芥川廃寺跡と南側の西国街道（旧山陽道）のほぼ中間地点にあたる。芥川廃寺の南側一帯は、これまで水路改修に伴う調査が2件おこなわれただけで、遺構の分布などについてはほとんど明らかにされていない地域である。調査は中請地のすぐ南側で平安時代初期の溝と橋跡が検出されていることなどから、関連する遺構の拡張を追求するため、車機を使用して全面調査を実施した。層序は耕土（0.15m）、床土（0.15～0.3m）、黄褐色粘土～砂層〔地山〕であり、遺物包含層は認めることができなかった。また、遺構についても調査地からはまったく検出することができなかった。地山面の地形は北西から南東に向って緩い傾斜をしており、標高は北西隅で15.4m、南東隅で15.8mを測る。

遺物（図版第17・18・49・50）

調査区から出土した遺物は、調査面積の割に非常に少なく、地山面から出土した旧石器2点と、東端で検出した旧水路跡から出土した少量の土器片、瓦片だけである。

今年度実施した峰上郡衙跡の調査では、各時代の石器が各調査区から少量出土しているが、説明の煩雑をふせぐため、ここで一括して説明をおこなうこととする。

13は本調査区の南側から出土した横長剥片を素材とした尖頭器である。両側縁を主剥離面側から急角度に調整し、先端部を銳利に尖らしている。時期は明確でないが国府期に属するものであろう。サヌカイト製。長さ5.7cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm、重さ5.8gを測る。16は本調査区の中央部南側から出土した石核である。左側縁に原礫面を有し、右側縁に小さな横長剥片を剥ぎとった剥離面が認められる。5は5-B北区の包含層から出土した薄い結晶片岩破片である。周囲には加工痕は認められないため、用途などについては不明である。7は5-B地区の溝1から出土した5角形礫である。両面には周辺部から丁寧な調整剥離が施され、中央部を少し厚く仕上げている。時期は明確でないが、5角形の特徴などから縄文時代晩期のものと考えられる。サヌカイト製。長さ2.8cm、幅1.9cm、厚さ0.55cm、重さ1.5gを測る。7はフローワーセンター用地から出土した凸基無茎式の石礫である。扁平な剥片を素材としており、両面には素材を剥離した時の剥離面が残されている。時期は弥生時代中期のものである。サヌカイト製。長さ3.9cm、幅2cm、厚さ0.5cm、重さ2.6gを測る。9～12は55-I・M地区から出土した旧石器である。9は左側縁に背面側から小さな調整を施していることから小形の翼状剥片と考えられる。右側縁の下半部には、微細な使用痕が認められる。10・11は中形の剥片であるが、大きさ・形態等からみて石核の打面調整時に剥離された剥片と考えられる。12は右側縁に直線的な刃部を有する削器である。下端部に原礫面を残す扁平な

剥片を素材にし、刃部は主刺離面側から急角度に調整剝離をおこなっている。石材は白色の溶結凝灰岩で、近畿地方では数少ない石材の一つである。長さ4.2cm、幅3.2cm、厚さ1.2cm、重さ14.2gを測る。13～15はフランクセンター用地から出土した国府型ナイフ形石器と剥片である。13は原端面を残す扁平な剥片で、刃縁には大きな刃こぼれが認められる。14は部厚い翼状剥片を素材としたナイフ形石器で、刃部下端には基部調整が施されている。15は扁平な翼状剥片を素材としており、背面には刃部と並行する稜線が認められる。背部は急角度な背部調整が直線に施され、主刺離面の下端部には基部を薄くするための調整剝離がおこなわれている。13は長さ5.5cm、幅3.1cm、厚さ0.9cmを測り、14は長さ5.2cm、幅1.9cm、厚さ0.9cm、重さ9.7gを測り、15は長さ4.6cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ3.6gを測る。3点はいずれもサヌカイト製。

旧水路跡から出土した土器類は、弥生時代から現代までの、各時期のものが含まれているが、いずれも細片のものばかりで、完形に復元できたものは少ない。1は須恵器の杯身である。底部はヘラ切り後ナデ調整がおこなわれているが、全体に矮小化が進んでおり、時期は古墳時代でも後期後半期のものと考えられる。2は奈良時代の大型の直口壺である。頸部に浅い一条の凹線が施されており、肩部に円形浮文がある。その他の土器についてはいずれも細片であって、器形の特徴などを詳しく述べることができないが、時期別に記すと弥生時代後期のものにして壺の口縁部(24・25)、壺腹片(26)などがある。古墳時代のものは須恵器杯身片(28・29)、壺腹片(31)があり、歴史時代のものは須恵器蓋杯片(30・35)などが数点ある。その他、近世から現在までの陶磁器片(36～39)なども少量出土している。特に今回出土した遺物の中で注目されるものに、6の墨書き陶器がある。墨書きは灰釉陶器の腕底に記されているが、残念ながら下半部は欠損しており明確ではない。しかし、筆の運びや字の大きさなどから「巫」と書かれていたことが推測される。灰釉陶器は上半部も欠損しており、時期等は明確でないが平安時代でも中頃のものと考えられる。

その他、出土品の中に芥川発寺の瓦と考えられるものが数点ある。いずれも平瓦片で瓦当文を有するものは認められない。凹面は布目を残しているが、凸面はナデ調整によって叩き面を消しておらず、端部はヘラ切り後面どり調整が施されるなど、全体的に丁寧なつくりである。時期は白鳳時代のものと考えられる。(大船)

10. 17-F・G・T地区の調査

当調査区は、高槻市清福寺町807-1番地にあたり小字名は清福之内と称する。現状は水田である。

今回、個人住宅建設に先立って発掘調査を実施したが、現在調査中のため、概略を述べる。

遺構(図版第19～22)

基本的な層序は耕土(0.1～0.2m)、床土(0.1m)、黄灰色土(0.2～0.3m)、灰褐色土(0.1～0.2m)、暗褐色土(0.3～0.4m)で地山は黄褐色土であるが、調査区東南部では拳大の礫が混じる砂礫層になっている。

遺構は堅穴式住居跡7棟をはじめ、掘立柱建物、土壙、井戸などが検出されている。

堅穴式住居には円形の1号住居跡があるが他は方形で、出土遺物からみて古墳時代前期とみられ

る。

1号竪穴式住居は円形で、直径約8mである。出土遺物がほとんど無いため、時期は確定できない。

2号竪穴式住居は、1号、3号竪穴式住居と重なっているが、一辺5.8mを測り、中央部に焼土痕が確認された。東側の側溝ぎわで、直径0.3m、深さ0.3mの円形ピットを検出した。上面から中位にかけて小石をつめている。後述の7号竪穴式住居でも検出されており、住居跡に伴うものであることはわかるが、性格は不明である。

3号竪穴式住居は、一辺5.2mを測り、中央部に炉が確認された。この住居跡は、構築時の床面の凹凸を貼り床によって平坦にしている。

4号竪穴式住居は、3号竪穴式住居の南西に接して、側溝の一部が確認されただけであるが、柱穴とみられるピットの位置から一辺約5mが推定される。また、焼土痕も確認されている。

5号竪穴式住居は、一辺約6mで、中央部に焼土痕の認められる炉がある。

6号竪穴式住居は一辺3.6～3.8mを測る小形の住居で5号住居より後出である。埋土から銅鏡が出土している。

7号竪穴式住居は元来、一辺約5mで、東と南へ約1m拡張して、一辺約6mになっている。中央部に一辺約1mの方形の炉が認められた。また、2号竪穴式住居同様、東側溝ぎわに小石の入った小ピットがある。

調査区の北壁付近に幅1～2m、長さ約4mを測る不定形の土壤1をはじめ、3号竪穴式住居の東南部に幅約1m、長さ1.5～2.5mを測る東西方向の土壤2～5がある。土壤1からは弥生時代末の土器が出土しているだけで、他は時期不明である。

掘立柱建物は3号竪穴式住居の東側に3間×4間の一棟が確認されただけで、他の柱穴にはまとまりがない。

ほぼ南北方向に一辺0.6～0.8mの方形ピットが5個検出されたが、柱間にまとまりを欠き、一向向しか検出されていないので、横列と考えられる。掘立柱建物同様、奈良時代とみられるが詳細な時期は不明である。

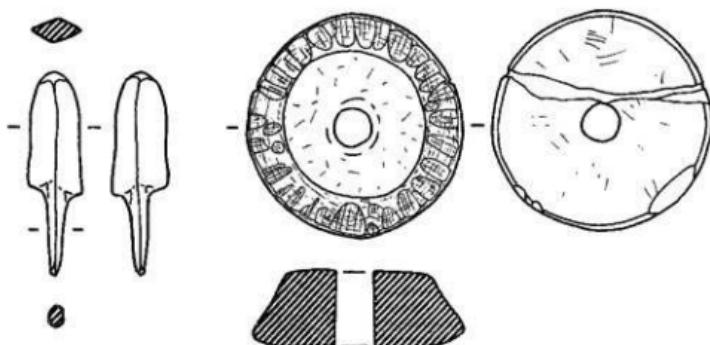
5号竪穴式住居の東側でも柱穴群がみられるが、直径0.2～0.4m程度で、いずれも中世とみられる。

土壤6は幅約1.6m、長さ3.7m、深さ0.4mで、上層から若干瓦器碗が出土している他は、まったく遺物は出土していない。他に、石組井戸が検出されているが、調査中である。

遺物(図版第23～26・50・51)

5号竪穴式住居から出土した銅鏡(1)は、弥生時代後期に属するものとみられる。弥生時代の遺物は土壤1から鉢(15・16)が出土している他は、暗褐色土層から壺(23～26)、甕・鉢(18・27～32)の破片が出土している。

古墳時代の遺物は、2号竪穴式住居から高杯(8)、3号竪穴式住居から二重口縁壺、小形丸底壺(2・3)が出土しているのをはじめ、暗褐色土層から小形丸底壺(4・5)、二重口縁とみられる壺(6・34～36)、甕(7・37・40)、高杯(9～13)、鼓形器台(14)が出土している。皿



挿図4 17-F・G・J地区 銅鏡、紡車

Scale 1 : 1

状の手づくね土器(19)も同時期とみられる。また、薄手の製塩土器の鱗片(41~49)も出土している。

須恵器は蓋杯(20・50~53)、高杯(54)、壺(56)、盤(55)などが出土している。また、滑石製の紡車(図版第17-3)も暗褐色土から出土している。また、同様の紡車(図版第17-4)がフローラセンター用地内からも出土している。

中世の遺物は土壤6から瓦器碗(22)、暗褐色土層から土師器皿(21)が出土している。

当調査区は調査継続中であるが、これまでに竪穴式住居が7棟検出されており、周辺の各調査区とともに、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて大集落を構成していたことがわかる。当調査区の場合、主に布留式土器に属する時期であり、今後これまでに検出されている竪穴式住居個々の分析により、集落内での変遷過程が良くわかるものと考える。

また、当調査区では中世の遺構・遺物が検出されており、これまでの調査とあわせて、現在の清福寺の集落付近に中世の集落も存在したことが明確になってきた。(橋本)

II 郡家本町遺跡

11. 郡家本町遺跡の調査

高槻市郡家本町1000番地の18にあたり、小字名は位前である。現状は雑種地で、最近まで畠作が行われていた。

今回、個人住宅の建設が計画されたため、発掘調査を実施した。

当調査区は嶋上郡街背後の小丘陵の南側斜面である。周辺では、弥生時代の遺物包含層をはじめ、

昨年度の調査では、郡衙に瓦を供給したとみられる窯跡も確認されており、郡衙と密接に関連した地域である。

遺構(図版第27-a・40)

調査地は段々畠状になっており、最下段にA、中段にB、上段にCの3つのトレンチを設定し、調査を実施した。

Aトレンチ

東西7.5m、南北4mのトレンチで、耕土(0.2~0.3m)、床土(0.1m)を除去すると、すぐにトレンチ北側で砂礫を混じえた黄褐色土が検出された。この黄褐色土は地山であり、トレンチ北側で東西方向の平坦面を形成し、南側へ約0.8m落ちこんでいる。この落ちこみには暗褐色土が厚く堆積しているが、遺物は土師器・須恵器の細片がわずかに含まれているだけである。北側の平坦面で遺構精査を行なったが、ピット等は検出されなかった。なお、トレンチの南壁より南側はコンクリート用水路建設工事で攪乱されていた。

Bトレンチ

東西3m、南北2.5mのトレンチで、地山の黄褐色土が南側へ下降しているだけで、遺構・遺物は検出されなかった。層序は南壁部分で、耕土(0.2m)、灰褐色土(0.4m)、褐色土(0.15m)、暗褐色土(0.35m)である。

Cトレンチ

上段で駐車場にされていた平坦部に、東西2.3m、南北1.5mのトレンチを設けた。層序は、表土(0.05m)、黄灰色土(0.4m)、灰褐色土(0.2m)、黄褐色砂礫(0.1~0.3m)、黄褐色土(地山)である。中央部で地山が段状になっているが、遺物もまったく検出されないため、人為的なものではなさそうである。

3つのトレンチを設けて調査を実施したが、丘陵の旧地形は、Cトレンチ付近から、Aトレンチ北側まで傾斜しており、Aトレンチ北側付近でわずかに平坦面を形成し、さらに南側へ下がり、現在の水田面に達しているようである。Aトレンチから南側の丘陵末端にかけて古墳時代以降の生活面が想定される。(橋本)



插図5 郡家本町遺跡の調査位置図

III 宮田遺跡

12. 宮田遺跡の調査

高柳市宮田町3丁目38-1番地にあたり、小字名は八反田と称する。現状は水田である。このたび、個人住宅を新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

中世の集落遺跡として著名な宮田遺跡は、国鉄浜津富田駅の北方約1kmに位置する。遺跡は富田穂層と呼ばれている低位段丘のはば中央部に立地し、北側を西国街道が東西に走り、すぐ東側を女瀬川が南流する集落遺跡としては好条件を備えた位置にある。遺跡の範囲は、西の春日神社から東の女瀬川まで約0.3km、南北は北の西国街道から南の工場地城まで約0.3kmを測り、阿武野地区の遺跡群の中では最大規模を誇っている。

今回の調査地は、本遺跡の北部に位置し、春日神社から東側約70mのところにあたる。調査はす



插図6 宮田遺跡の調査位置図

ぐ東側の調査区で検出した旧女瀬川の流路を確認するため、中諸地の西側に東西4m、南北30mのトレントを設け、重機(ユンボ)を使用しておこなった。トレント中央部の層序は、耕土(0.2m)、床土(0.3m)、暗灰色粘土層(0.2m)、黄灰色粘土層(0.1m)、暗灰色粘土層(0.1m)で、それより下は旧女瀬川の堆積層となっている。地山面は黄褐色粘土層である。調査の結果、トレント内からは土壙1基と女瀬川の旧河床を検出した。土壙はトレントの南側に位置し、西側は調査区域外にある。規模は南北幅0.9m、深さ0.15mを測り、断面は皿状を呈する。埋土は茶褐色土層であり、出土物は認められなかった。旧女瀬川は、トレントのはば中央部に位置し、西側の上流域は蛇行するためか方向を少し南側に振っている。規模は幅約12m、深さ約1mを測り、断面は深い皿状を呈する。土層の堆積状況は、両岸から2m付近までが黒灰色～暗灰色粘土質の薄い堆積層になっており、ゆるやかな流れによる堆積がおこなわれたことが推測される。それに比べて中央部付近は、青灰色～黄灰色砂層の堆積層が形成されており、多量の水流によって短期間に埋没したことが考えられる。旧女瀬川からの出土遺物は、中央部の青灰色砂層から出土した自然の流木と少量の布留式土器片がある。布留式土器の器種構成としては高杯(1・10)、甕(3~8)、直口甕(9)がある。時期については、出土点数が少ないので明確でないが、4世紀でも後半頃のものであろう。その他の遺物としては、床土・暗灰色粘土層(整地層)中から出土した奈良時代から平安時代前半期の須恵器・土師器片がある。これらはいずれも細片であって、完形に復元できるようなものは認められ

土遺物は認められなかった。旧女瀬川は、トレントのはば中央部に位置し、西側の上流域は蛇行するためか方向を少し南側に振っている。規模は幅約12m、深さ約1mを測り、断面は深い皿状を呈する。土層の堆積状況は、両岸から2m付近までが黒灰色～暗灰色粘土質の薄い堆積層になっており、ゆるやかな流れによる堆積がおこなわれたことが推測される。それに比べて中央部付近は、青灰色～黄灰色砂層の堆積層が形成されており、多量の水流によって短期間に埋没したことが考えられる。旧女瀬川からの出土遺物は、中央部の青灰色砂層から出土した自然の流木と少量の布留式土器片がある。布留式土器の器種構成としては高杯(1・10)、甕(3~8)、直口甕(9)がある。時期については、出土点数が少ないので明確でないが、4世紀でも後半頃のものであろう。その他の遺物としては、床土・暗灰色粘土層(整地層)中から出土した奈良時代から平安時代前半期の須恵器・土師器片がある。これらはいずれも細片であって、完形に復元できるようなものは認められ

なかった。（大船）

13. 宮田遺跡の調査

高槻市宮田町3丁目43・44番地にあたり、小字名は八反田と称する。現状は水田である。このたび、駐車場を造成する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北端に位置し、春日神社より東側約100mにあたる。調査は遺構・遺物の分布が希薄な地域であることから、申請地に2m角のトレンチを20ヶ所設け、遺構の確認と層序の観察をおこなった。調査区の基本的な層序は、耕土（0.2m）、床土（0.1～0.3m）、暗褐色土層（0.1～0.3m）、黄灰色砂質土層〔地山〕である。地山面の地形は、南西部から北東部・東部に向って緩く傾斜しており、標高は18.7～19.3mを測る。検出した遺構は少なく、弥生時代後期の溝1条と、女瀬川の旧河床だけであり、その他、柱穴・土壤等の遺構はまったく認められなかった。弥生後期の溝は、調査地の南側に位置する東西溝である。規模は幅0.9～1.5m、深さ0.05～0.2mを測り、東に向って緩く傾斜している。埋土は上層が暗褐色土層、下層が暗灰色砂層であり、完形の甕（2）が溝底に接した状態で出土した。女瀬川の旧河床は、西南隅で北岸の一部を検出した。検出した河床の大部分は調査区域外にあり、詳細については不明である。旧女瀬川の河床の堆積状況は、西調査区とはほとんど同様に青灰色～黄灰色砂層が約1mの厚さで堆積していた。

出土遺物は、弥生時代後期の東西溝から出土した完形の甕を除けば、ほとんどが床土から出土した土器・瓦の細片である。2の甕は、体部が球形に近く、最大腹径は中位にある。器表面は左下りの叩き目が施され、内面は器壁が荒れて明確でないがナデ調整をしている。口縁部はわずかに立ちあがった後ち上縁部を少し外彎させている。また底部は体部成形後、外部に粘土を補って、手捏ねで成形している。粘土は砂粒を多く含み、色調は灰褐色を呈す。時期は畿内第V様式でも終末頃と考えられる。その他の遺物としては、須恵器の蓋杯（26～28）、壺（24・29～31）、土師器の高杯（34）、黒色土器（33）、土師器の皿（36）、土師器の甕（25）、瓦器の壺（32）、瓦質の羽釜（35）、磁器の壺（39）、磁器の皿（37・38）、瓦片（40）などがある。時期は奈良時代から中世までの長期間のものがみられる。（大船）

IV 富田遺跡

14. 富田遺跡の調査

高槻市富田町4丁目488-6番地にあたり、小字名は西ノ口と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅を新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、発掘調査を実施した。調査地は、普門寺の西南方約130mのところで、昭和51年の夏に調査した旧富田小学校の地区とは約70m離っている。地形的には、低位段丘南端上縁部に位置している。調査は、届出地の中央部に



挿図7 富田遺跡の調査位置図

$3\text{m} \times 3\text{m}$ のトレンチを設定しておこなった。層序は、盛土 (1.1m)、黄灰色砂質土層(整地層) (0.2m)、黒灰色土層(旧耕土) (0.1m)、茶灰色土層(遺物包含層) (0.1m) となり、以下は黄褐色礫土層の地山となる。遺構および遺物は調査区が狭小なためか、検出できなかった。

今回の調査地は、遺跡の中心部に比較的近いことから、何らかの遺構が発見される期待があったが、段丘端部に位置している条件によるのか、検出できなかった。今後周辺地区での本格的な調査がまたれる。

(森田)

V 塚脇古墳群

15. 塚脇7号墳の調査

高槻市塚脇1丁目321番地の1にあたり、小字名は大塚である。帶仕山の南麓に分布する塚脇古墳群の1基として、早くから知られていた。最近まで、民家裏の竹林として残っていたが、今回、墳丘北東隅から周濠部にかけて、住宅建設が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。



挿図8 塚脇古墳群の調査位置図

遺構 (図版第32・33・42・43)

これまで、7号墳については、方墳であることはわかっていたが、測量図が作成されていなかったので、調査に先立って墳丘測量を実施した。調査の対象となった墳丘北東隅は旧状を良くとどめており、墳丘裾の等高線はほぼ直角である。墳丘北西隅から西側の裾にかけては、塚脇の集落へつなぐ道路のために、かなり削られ、等高線も円形に近くなっている。また、南側も民家のために $4\text{m} \sim 5\text{m}$ 程度墳丘裾が削ら

れており、羨道部の側壁が露出している。

調査は、墳丘東北隅の周濠の旧状を確かめ、周濠とほぼ直交する墳丘裾部の断面を観察した。

周濠は、墳丘裾では直角に、外縁の隅は丸味をもつて淡黄灰色砂礫の地山に掘削されている。東側では、幅6.5m、深さ約2mを測る。底部の幅は約2mで、底部から約0.5mまでは暗黃灰色土・暗灰褐色土が、墳丘側と周濠外側から序々に流れ込んだ状態で堆積している。暗灰褐色土上部には、黃灰色土が厚く堆積しており、周濠中央部では約1.2mを測り、一時に埋められたようである。黃灰色土上部には、0.3～0.5mの灰褐色土が堆積し、墳丘上へづびいている。

北側では、幅4.8mを測るが、中央部にかけてV字状に掘削され、深さは約1.8mである。底部から約1.2mまで、暗灰褐色土が堆積し、東側より早い段階に、周濠の肩部付近まで埋まつたらしい。暗灰褐色土の上部には、最近のゴミ穴が掘られていた。

つぎに、墳丘部の断面をみると、約0.3mの表土（腐殖土）と0.3～0.6mの灰褐色土が全面に堆積し、元来の盛土は灰褐色土以下とみられる。

盛土は、まず平坦に削平された淡黄灰色の地山上に厚さ約0.2mの暗褐色砂質土と厚さ0.3～0.6mの黄褐色砂礫がほぼ均質に置かれている。墳丘中央部では、間に厚さ0.1mの灰褐色粘土の層がみられる。

黄褐色砂礫の上部から灰褐色土までの0.3～0.5mの間には、厚さ0.1～0.2mの黒色土、暗灰色などが交互にレンズ状の堆積をして、墳丘盛土となっている。

遺物（図版第33・52）

出土遺物の多くは周濠の黄灰色土層から出土している。古墳時代の遺物としては、須恵器蓋杯（2～4）、高杯（5）、甕（1）がある。3の須恵器杯のみ暗灰褐色土層から出土している。他に、土師器皿（6）、土師器羽釜（7・8）、丹波あるいは信楽焼とみられる擂鉢（9）、備前焼擂鉢（10）が出土しているが、中世末～近世初頭のものである。また鏡破片（11）も出土している。

塚脇7号墳は、従来の見地では、一辺約21mの方墳と考えられてきた。今回の調査では、墳丘東北隅を確認することができた。南側の民家によって削られたために露出している石室羨道部を中心として図面上で左右対称に復元すると一辺は約25mの方墳となる。

周溝は、東側で幅6.5mとかなり大規模に掘削されているが背後はやや省略気味である。

石室は、羨道部の側壁が露出しているが、墳丘中心部では、表土と灰褐色土の約1mを除いても、地山面までは約1.5mを測るものとみられる。石室は地山面を掘削して構築されるはずであり、付近の塚脇X-1号墳のように石室高の半分以上が地山面を掘削しているとするならば、石室床面から天井石内面まで2m程度の規模は充分考えられる。

なお、時期は石室が未調査であるためはっきりしないが、周濠出土の須恵器蓋杯を参考にすると6世紀末から7世紀初めと考えられる。（橋本）

VI 史跡今城塚古墳確認調査とともになう花粉分析について

I はじめに

今城塚古墳の確認調査に際し、濠底堆積土の花粉分析を実施したので報告する。

試料は次の4点である。

試料番号	採 取 場 所	土 質
No 1	トレンチ A 濠底堆積土 上	黒褐色粘土
No 2	トレンチ A 濠底堆積土 下	黒褐色粘土
No 3	トレンチ B 濠底堆積土 上	黒褐色砂質土
No 4	トレンチ B 濠底堆積土 下	黒褐色砂質粘土

表2 花粉分析試料について

II 結 果

各試料とも花粉化石の残留状態がよく、それら花粉化石について同定・計数をおこなった。中に
は同定不能のものや、不確実のものもあったが、これらについては計数せず、同定の確実なもの
についてのみ計数をおこなった。

同定した花粉化石数は主要樹木花粉が
500個以上になるようにした。しかし、
草木花粉はきわめて少なく、検出花粉總
数の4.0%前後にすぎない。

主要樹木・草本について検出された花
粉を種・属・科ごとに整理したのが表3
・4である。ただし、樹木花粉について
は百分率(%)、草本については検出実數
で示す。



挿図9 花粉分析試料採取位置図

表3 今城塚古墳花粉分析結果・樹木花粉

	トレンチA 淤底堆積土		トレンチB 淤底堆積土	
	上	下	上	下
イ チ ョ ウ 属				0.3
モミ・トウヒ属	2.6	3.6	1.7	4.9
ツ ガ 属	0.9	1.2	0.2	0.7
マ ツ 属	19.2	11.2	24.5	43.8
コ ワ ヤ マ キ 属	0.6	0.5		
ス ギ 属	1.9	2.2	5.1	2.3
ヤ ナ ギ 属			0.2	0.3
ヤ マ モ モ 属	0.2	0.2	0.2	
ク ル ミ 科			0.4	
ク マ シ デ 属	0.7	0.5	0.6	0.5
ハ シ バ ミ 属	0.6	0.3		
シ ラ カ ッ パ 属	0.7	0.2	0.2	0.5
ハ シ ノ キ 属			0.6	0.3
ブ ナ 属	0.7	0.3		1.2
コ ナ ラ 亞 属	14.9	26.0	19.4	17.6
ア カ ガ シ 亞 属	46.9	48.2	40.9	12.0
シ イ ノ キ・クリ 属	3.9	2.5	3.0	2.8
ニ レ ・ケ ャ キ 属	0.7	0.3	0.4	0.5
エ ノ キ・ム ク ノ キ 属	3.0	1.5	0.9	10.8
モ チ ノ キ 属	0.9	0.3	0.9	
カ エ デ 属		0.3	0.4	0.3
ツ ツ ジ 科	0.4	0.2	0.2	0.5
カ キ ノ キ 属	0.6	0.2		0.5
エ ゴ ノ キ 属	0.6	0.3	0.2	0.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0

(樹木) (%)

表4 今城塚古墳花粉分析結果・草本花粉

	トレンチA 濛底堆積土		トレンチB 濛底堆積土	
	上	下	上	下
イネ科 大	3	3	1	6
〃 小	10	2	2	2
ソバ	1		1	
ウリ科	1	1		
ヨモギ	4	5	4	4
アカザ科	2			
セリ科	2	1	5	3
ヒシ	3	2	2	1
タデ科	2	2		
ギシギシ	3	2	4	4
ガガブタ	2			1
ハス	1			
ガマ	1		1	
ミチャナギ			1	
ヒツジグサ			1	
カヤツリグサ科				1
スイカズラ科				1
計	35	18	22	23
全花粉に対する割合	6.12%	2.95	2.99	3.84

(草本) (実数)

III 考 察

採取地点は挿図9に示したように、トレンチAとトレンチBの2ヶ所で、それぞれ上下の2層より試料を採取した。

両地点に標高差があるとしても、堆積層の状態から両試料の各層はそれぞれ同じ時期に堆積したものと考えられる。この観点から考察を加えていくことにしよう。

(1) 上層

トレンチA

検出された全花粉中、コナラ属が約60%を占めていて、中でも大半が常緑のアカガシ亜属である。次いでマツが多く、全体の19%となっている。

草本では水生植物のヒシ・ガガブタ・ハスや湿地生のセリ・ガマがみられる。

トレンチB

トレンチAと同じ傾向で、コナラ属が全体の60%と多く、次いでマツが約25%となっている。コナラ属の中でもアカガシ亜属が優勢を示しているのはトレンチAの場合と同様である。

草本では水生・湿地生のヒシ・ヒツジグサ・セリ・ガマ等が検出されている。

(2) 下層

トレンチA

コナラ属が70%以上ときわめて多い。特に常緑のアカガシ亜属が多いのは上層の場合と同じで、全樹木花粉の約50%近い値を示している。次いでマツが多い。

草本では水生のヒシ、湿地生のセリがある。

トレンチB

前述の3試料と異なりこの試料ではマツがきわめて多く全樹木花粉の約44%を示している。次いでコナラ属の30%、エノキ・ムクノキ属の11%となる。

草本ではヒシ・セリ等、水生・湿生のものが検出されている。

以上が各層についての検出状況であるが、上層では両地点ともコナラ属が多く、次いでマツとなっている。したがって、当時この周辺にコナラ属、特に常緑のアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が広く存在していたと考えられる。

ところが下層では両地点で全く異なる結果になっている。すなわち、トレンチAではアカガシ亜属を主体とするコナラ属が多いが、トレンチBではマツが優位をしめている。同じ時期に堆積したのであれば特別の事情のない限り同じ傾向の検出結果がでなければならない。しかしにこのような結果になっているのは何故であろうか。数少ない分析結果だけで結論めいたことを述べるのは至難かつ危険であるが、ただ考えられるのはトレンチBのすぐ近くにマツがあったためにマツ花粉の検出量が多くなったということであろう。

たまたまトレンチAの近くにマツがなく、トレンチBの近くだけにマツがあれば当然このような結果になろう。上層でもトレンチBの方がトレンチAよりマツ花粉が幾らか多く検出されているが、前述のことを裏付けるものであろう。トレンチBのみについて上下層をくらべてみると、コナラ属とマツの検出状況が正反対になっている。これはトレンチBの近くにあったマツが何等かの原因で

姿を消し減少したためと考えられる。

このように考えると、古墳周辺にはコナラ属を主体とした照葉樹林が存在し、トレンチBのすぐ近くにマツが生育していた。そして時代の経過と共にマツが次第に減少して上層の結果にみられるよう兩地点で同じような傾向を示すに至ったと考えられる。

草本花粉で大型イネ科が検出されているが、恐らくこれはイネであろう。すぐ近くにイネ栽培の田があったのではなかろうか。その他、食用穀としてソバ花粉が両地点とも上層から検出されている。古墳が出来てから近くでソバを作っていた畑があったと考えられる。また、試料採取地点が瀬という特殊環境だけに、水生のヒシ・ハス・ガガブタ・ヒツジグサが検出されている。水を湛えた場にこのような草本が生育し、浅瀬にはガマ等が茂っていたのではないか。（徳丸）

Ⅷ ま と め

今年度は鳴上郡衙跡および隣接する周辺遺跡の調査を15ヶ所で実施した。鳴上郡衙跡の調査はそのうち9ヶ所でおこなわれたが、いずれも遺跡の外辺部の個人住宅の建替えによるもので、郡衙跡に直接関係するような遺構・遺物はほとんど認められなかった。しかし、北辺部の5-J・K地区、17-F・G・J地区の調査では、鳴上郡衙が成立する以前の弥生時代後期から占拠時代前期の堅穴式住居址・溝が多数検出されたのをはじめ、郡衙廃絶後の掘立柱建物跡・井戸等も重複して検出され、郡衙北辺地域の住居群の様子をかなり詳しく知ることができるようになってきた。以下、今年度の調査で得られた遺構・遺物の資料をもとに少しまとめてみることにする。

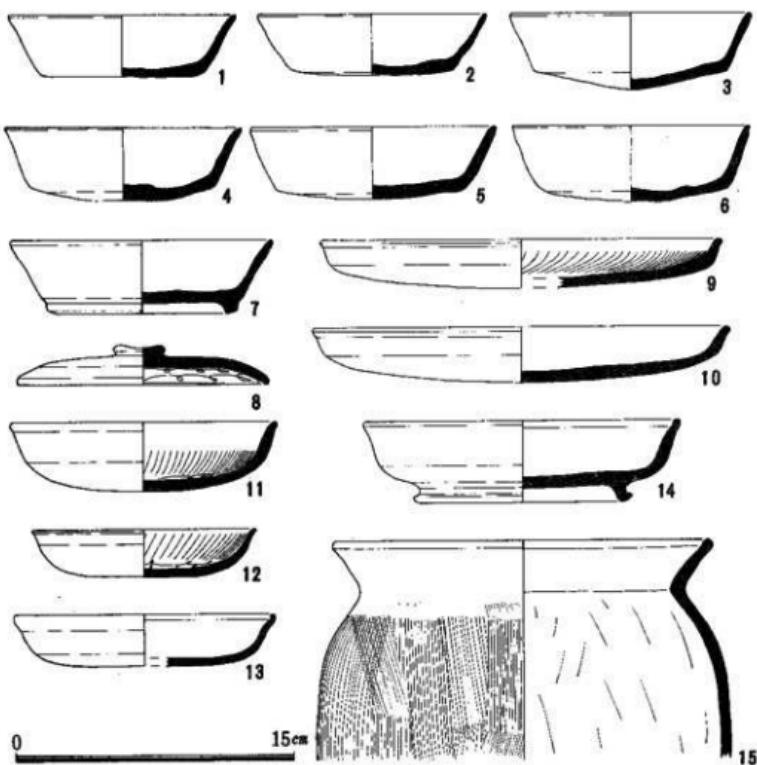
旧石器時代の遺物は、鳴上郡衙跡の全域から出土することが、これまでの調査成果から知られており、今年度も芥川廃寺の南側の2ヶ所の調査区から国府期に属する石器が若干出土した。出土した石器は完形品が少なく、出土状態も悪いことから、石器組成や当時のキャンプ跡を解明するまでに至っていない。しかし、石器の出土状況および出土密度などから推して、近い将来、この付近で良好なキャンプ地が発見される可能性が高いと考えられる。

弥生時代の遺構・遺物は、北側の調査区を中心に多くの資料が検出された。今年出土した遺物の中で特に注目されるものに、17-F・G・J地区から検出した銅鏡が1点ある。銅鏡は完形のもので、身は柳葉形を呈し、長い茎部をもつものである。時期は明確でないが弥生時代後期のものであろう。銅鏡の出土は、安満遺跡（1点）と芝生遺跡（2点）の2ヶ所が知られているだけで、本遺跡を入れると遺跡としては3番目、遺物としては4例目になる。これまで銅鏡の出土した遺跡は、各地域を代表する拠点集落と考えられる重要な遺跡だけに、本遺跡の弥生時代についても、大いに評価されるべきであろう。また、弥生時代で注目される遺構としては、5-J・K地区で検出した後期後半の溝がある。鳴上郡衙跡では、これまで同時期の溝が北西部の14-J・M地区、中央部の27-F地区、南部の75-H・L地区などほぼ全域から検出されている。溝の機能などについては明確でないが、地山の等高線にはほぼ並行して北東から南西方向に走っていることから、水路として掘られた可能性が高い。これらの水路は、中期の段階ではほとんど認められなかったもので、この時

期になって初めて大規模な開発が、本遺跡でおこなわれたことを示している。また、こうした水路の掘さく時期が、集落の規模が飛躍的に拡大した時期と時を同じくすることは注目されてよい。

古墳時代の資料としては、17-F・G・J地区から検出された前期の竪穴式住居址群と、住居址から出土した一括の布留式土器がある。嶋上郡衙跡の調査では、これまで古墳時代の竪穴式住居址を100棟以上も検出しているが、全体に遺構の遺存状態が悪く、住居址からほとんど遺物が出土しないのが一般的である。それだけに、今回出土した布留式土器の一括資料は、三島地方の古墳時代研究にも一石を投じる資料となろう。なお、南側の55-I・M地区からはヘラ記号を有する埴輪片が出土しており、墳丘が削平されてしまった古墳の存在が考えられる。

中世の資料としては、5-J・K地区で検出した石組井戸・掘立柱建物群と少量の陶磁器類・鉄



挿図10 嶋上郡衙跡 フラワーセンター用地土壤一括出土遺物

製品・木器類がある。特に井戸の底から出土した包丁は、市内の遺跡から出土した初めての遺物であり、中世の生活を具体的に知る数少ない資料となろう。

その他、嶋上郡衙跡では、フロワーセンターの建設に伴って大規模な発掘調査が行なわれた。今回の調査地は、芥川廃寺跡のすぐ北側に位置し、史跡指定地と北の府道郡家-茨木線に挟まれた地区である。検出した遺構は、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての堅穴式住居址10棟、7世紀から中世までの掘立柱建物跡10棟以上、弥生時代後期から中世までの井戸5基、各種の土壙等が多数ある。この付近一帯の地形は、地表面がほとんど平坦で、住居地として適していたらしく、弥生時代から中世まで連續して生活が営まっていた。また、遺構の検出状況や遺物の出土状況などから、居住区はさらに西まで拡がっていたことなども確かめられている。

特に今回の調査区では、弥生時代から中世までの住居址が多数検出されており、芥川廃寺跡北辺部の様子がかなり解明されてきている。また、フロワーセンター南側に位置する道路の拡張工事でも、奈良時代の掘立柱建物群が検出されており、居住区がさらに南まで拡がっていたことが確認されている。(大船)

今年度の調査は、嶋上郡衙跡の他に安満遺跡、芝生遺跡、高槻城跡等でも大規模な調査が実施され、貴重な成果が多く得られている。そこで各遺跡の調査概要を簡単に記してまとめとしたい。

芝生遺跡は芥川の右岸にあって、芥川と淀川の合流点から北へ約1Kmのところにある。遺跡は昭和58年に市立総合体育馆建設工事の際発見されたもので、今回の調査は体育馆の西隣に建設される市立陸上競技場兼球技場の工事に先立って実施したものである。調査は東西2ヶ所の調査区(A区・B区)を設けておこなったが、西側のA区からは遺構は検出されなかった。B区は東西約40m、南北約45mの凸型を呈したものである。遺構面は現地表下3~4mにあり、標高は4~5mを測る。遺構は弥生時代中期と後期のものがある。中期では住居址・土壙・土器棺墓・土器溜などを検出している。住居址は円形のものを検出しておらず、いずれも火災にあっている。後期では、環溝の付随する円形住居址・大溝・井戸・土壙・柱穴・落ち込みなどを検出している。住居址は、径5~6mを測り、3回以上の建て替えがおこなわれている。大溝は幅4~6m、深さ1~1.2mを測り、溝内から大量の土器が出土している。落ち込みは調査区の北半から西側に拡がっており、遺構面との比高差は0.8~1.3mを測る。遺物としては、土器が最も多く、その大半は大溝と落ち込みから検出した後期前半のもので、とりわけ大溝の資料は、層位別に取り上げることができたため良好な資料となる。また土壙からも各器種を含む一括資料が出土している。個別的には皮袋形土器や土偶が注意を惹く。中期の土器としては、土器溜や土壙からおおむねその前半期のものがまとまって出土している。石器は、中期のものを中心として、石鎌・石製穂摘具・石斧・石錐・剥片石器・叩石・砥石があり、なかでも1点のチャート製アメリカ式石鎌は特筆される。木器は、いずれも後期前半で、穂摘具2点・鎌1点・鎌の把手1点・鍬1点、こて状木製品の未製品2点・舟舟1点・杵1点・有孔板2点・杭數本がある。金属製品としては、主に後期の遺構から銅鏡2点・銅劍1点・銅錐1点がある。

芝生遺跡は芥川下流域に営まれた農耕集落であるが、淀川にはほど近くて、対岸にある河内の諸集

落がみわたせるところにある。徴的には河内に対する三島の門戸にあたり、大きくは淀川を介しての流通圏の要衝に位置することになる。出土した土器の内、河内産（生駒西麓産）土器の占める割合が安満遺跡をはるかにしのいでいることは前者に対応し、アメリカ式石鐵の存在は、後者を象徴的にものがたるものであろう。（森田）

高櫻城跡では、市立第1中学校の体育館が建替えられることになったため、工事に先立って発掘調査を実施した。調査地は、高櫻市城内町1445番地、小字名は辰曲輪である。小字名のとおり、高櫻城絵図（箕面市仏日寺蔵）では、二ノ丸東側の辰曲輪に相当し、内堀や橋・桟形門が描かれている。

遺構は、絵図のとおり、内堀や桟形門の基礎をはじめ、戦国期の溝なども検出した。

内堀は、西側肩部から中央部にかけての部分しか調査できなかったが、黄褐色の地山を約1m掘削して、幅約6mの犬走り状平坦面をつくり、さらに東側（中央部）にむけて、徐々に下降している。平坦面との境に太さ約5~10cmの丸杭を打ち並べて護岸している。

桟形門の基礎は、堀の脚部付近から平坦面を約1m掘削し、栗石をつめ込んだもので、幅約8mを測り、堀の内側へ約3m張り出している。張り出した栗石は、堀の堆積土上に二次堆積しており高櫻城破却時に石垣を抜きとり堀内にはらまかれたものであろう。

内堀より西側で、戦国期の溝や石敷が検出された。いずれも焼土が混じり、火災に遭ったらしい。

溝は2本検出されたが、いずれも内堀とほぼ平行している。このうち、溝1は、幅3~3.5m、深さ0.7mを測るしっかりした遺構である。また、小形の石組井戸を検出しているが、溝1埋没後のものである。

平安期の遺物が若干出土したため、調査区北東部に試掘壕を設けたところ、近世高櫻城の面から約1m下で、数個の柱穴を検出した。出土遺物から平安中期・10世紀代であろう。

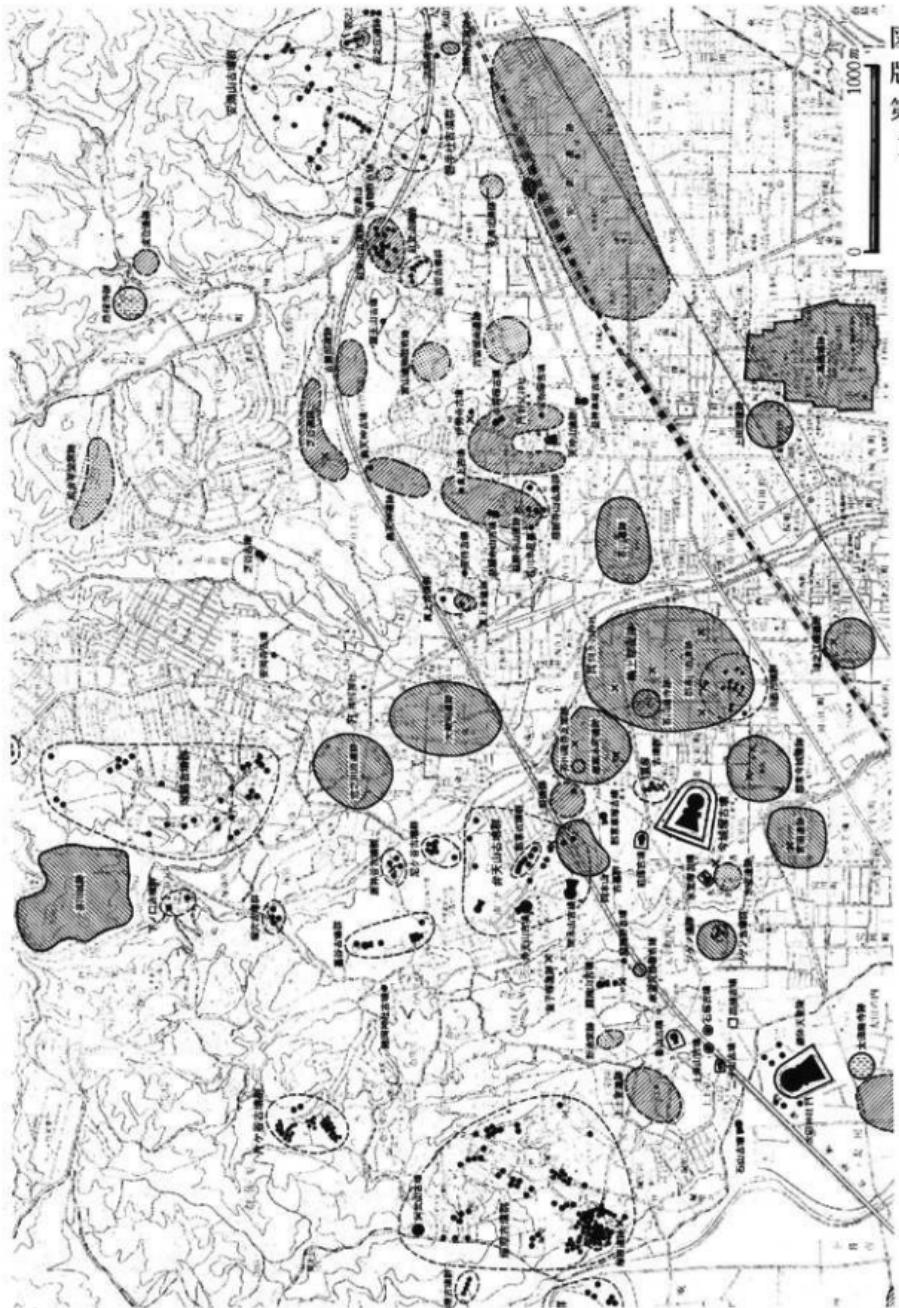
出土遺物は、内堀から近世高櫻城の瓦がコンテナに約100箱出土しているのをはじめ、戦国期の溝と石敷から、備前産の擂鉢・甕・壺、瀬戸・美濃産の天日茶碗・水注・皿、中国産の染付碗・皿青磁碗などが出土している。また、井戸からは、志野茶碗、中国産青磁碗が出土している。

今回の調査では、辰曲輪東側の内堀と桟形門を検出すことができた。絵図に描かれている土居は検出されなかったが、内堀や桟形門の位置は記載どおりで、高櫻城復元上有意義な調査であった。

また、戦国期の火災に遭った遺構の検出は、天正元年（1573）に高山飛驒守らが和田惟長を追放した際の史実を裏付けることになろう。さらに、下層の平安中期の遺構は、この時期の集落分布を知る上で重要である。（樋木）

安満遺跡では、東部方形周溝墓群の一画を調査した。検出した周溝墓は、合計11基で台状部の規模は最少が4.4m×5.6mで、最大は1辺9.6mを測るものがある。このうち供獻土器を検出したものは、5基である。時期は第Ⅱ様式が3基、Ⅰ様式とⅢ様式の土器が併存している周溝墓が2基ある。なお供獻土器ではないが、周溝のすぐ近くから第Ⅰ様式の壺型土器が1個体分が出土しており、東部方形周溝墓群の造営時期を探るうえで重要な資料となろう。また、今回の調査によって、当該周溝墓群の南東端部を確定することができた。ともに今後の安満遺跡の調査において、一つの指針を与えるものであろう。（森田）

図 版



鶴上郡衙跡とその周辺



a. 5-B 地区 南トレンチ（東側から）



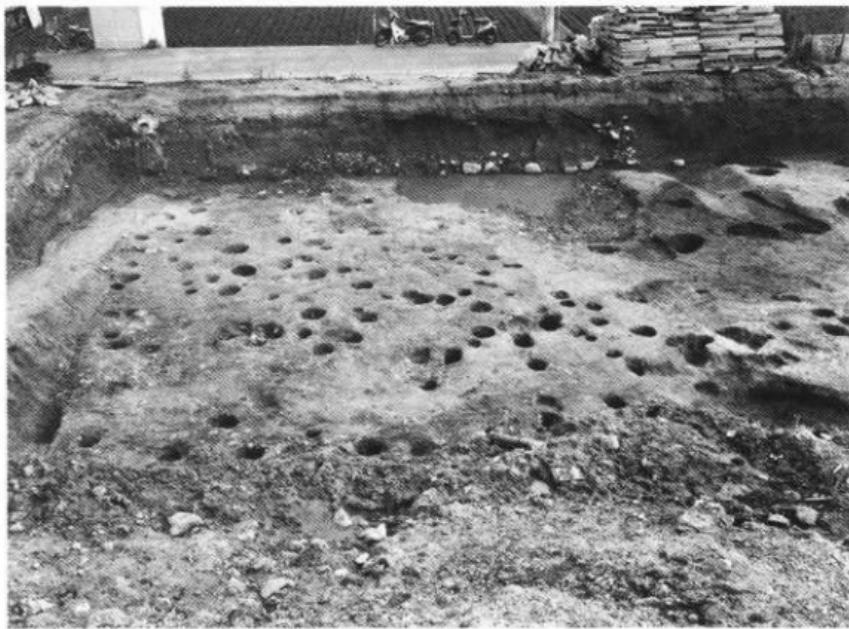
b. 5-B 地区 南トレンチ（西側から）



a. 5-J・K地区 北調査区全景（西側から）



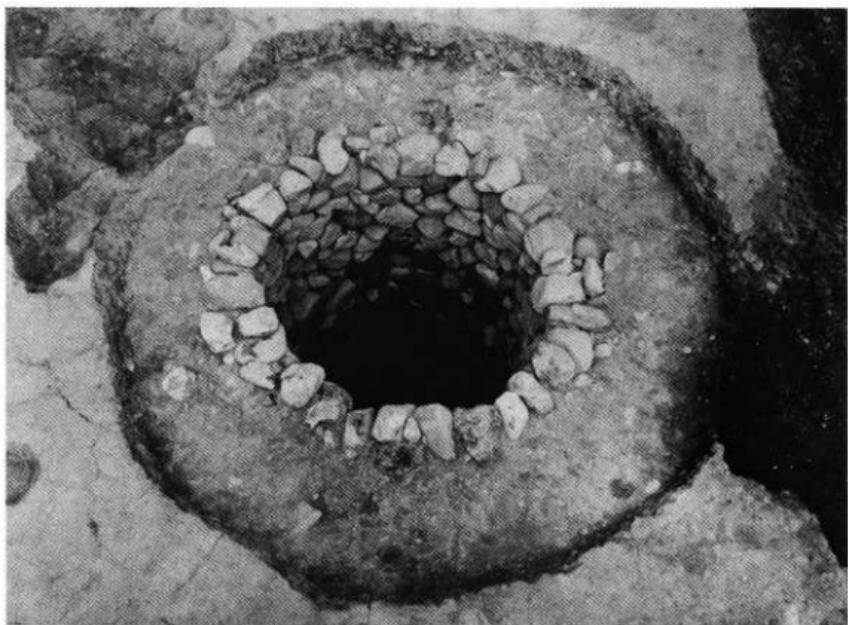
b. 5-J・K地区 北調査区全景（東側から）



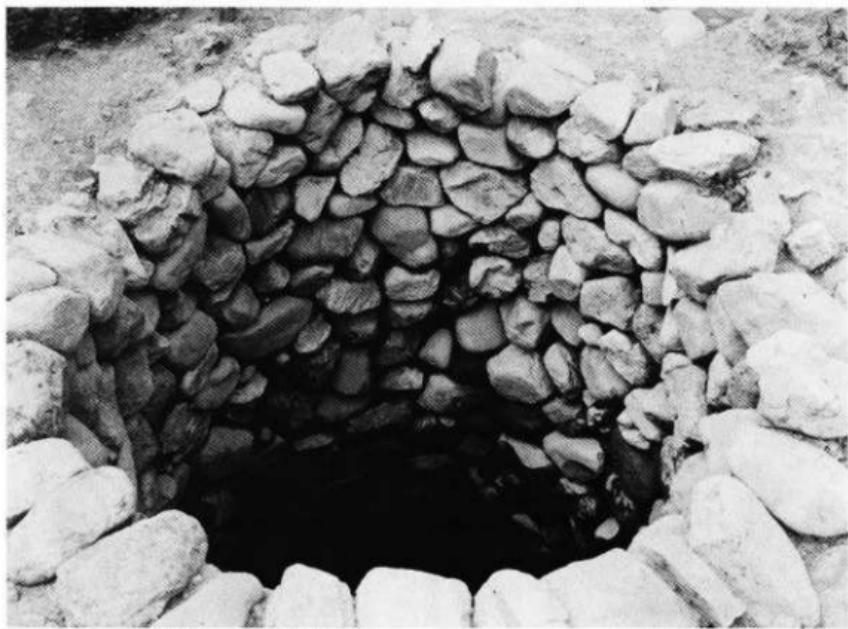
a. 5-J・K地区 南調査区全景（北側から）



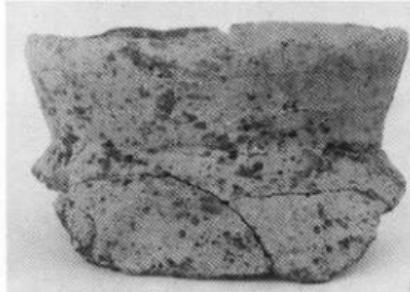
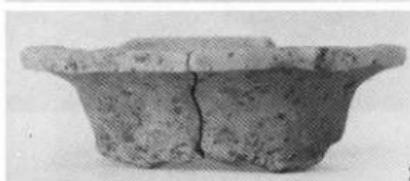
b. 5-J・K地区 南調査区全景（西側から）



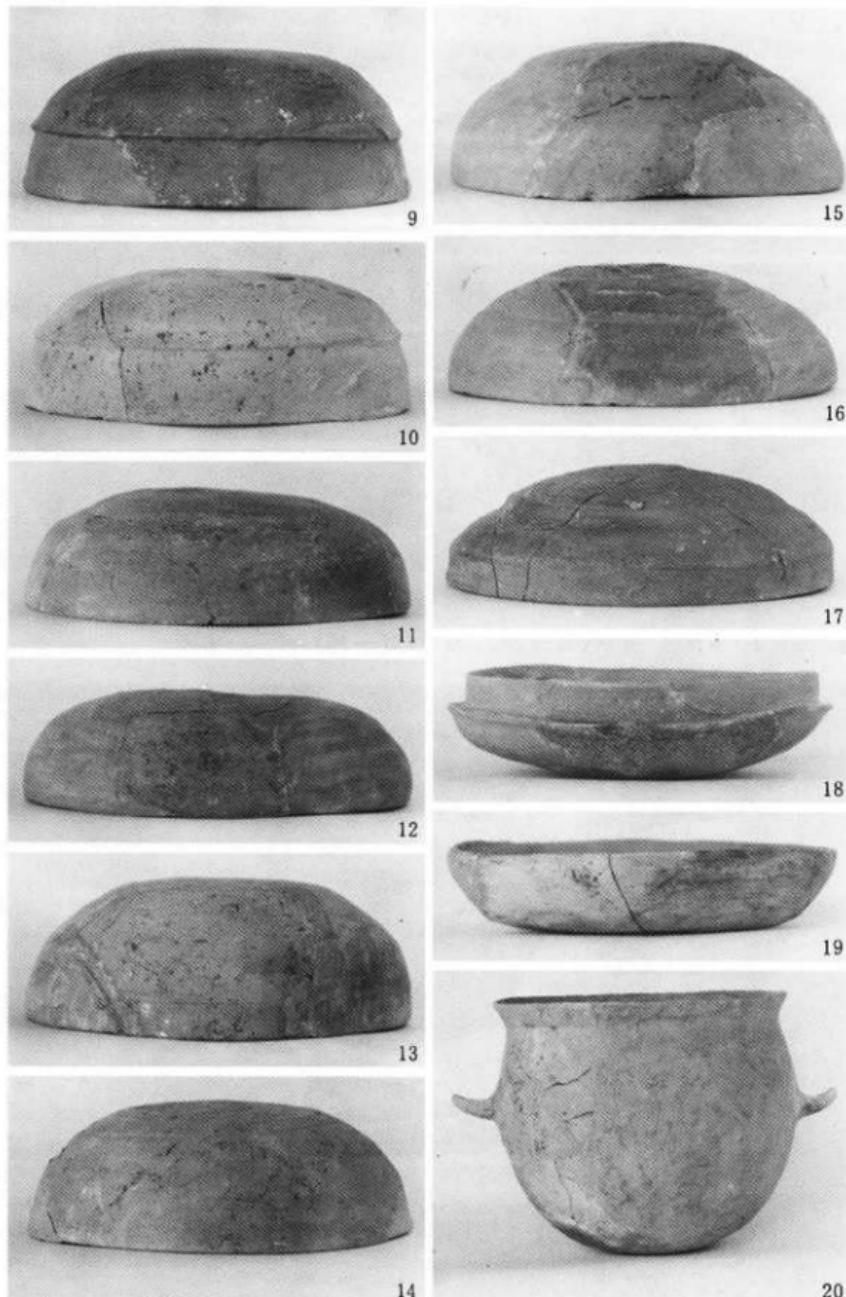
a. 5-J・K地区 井戸（西側から）



b. 5-J・K地区 井戸（南側から）



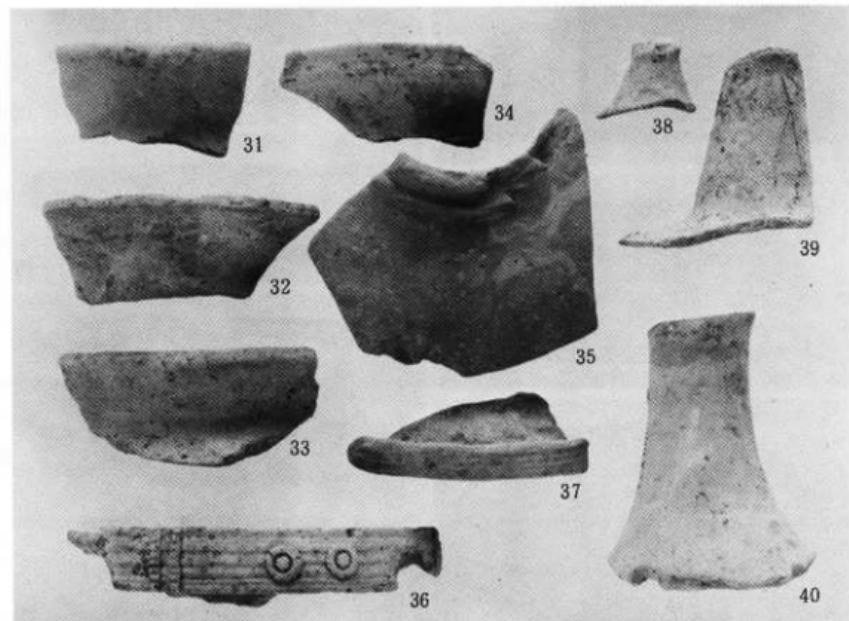
5-J・K地区 溝3(1), 溝1(2・3・5・7), 包含層(4・6), 落ち込み1(8)



5-J・K地区 包含層(9・11・12・14・17・18),溝1(10・20)
落ち込み(13・15・16),柱穴(19)

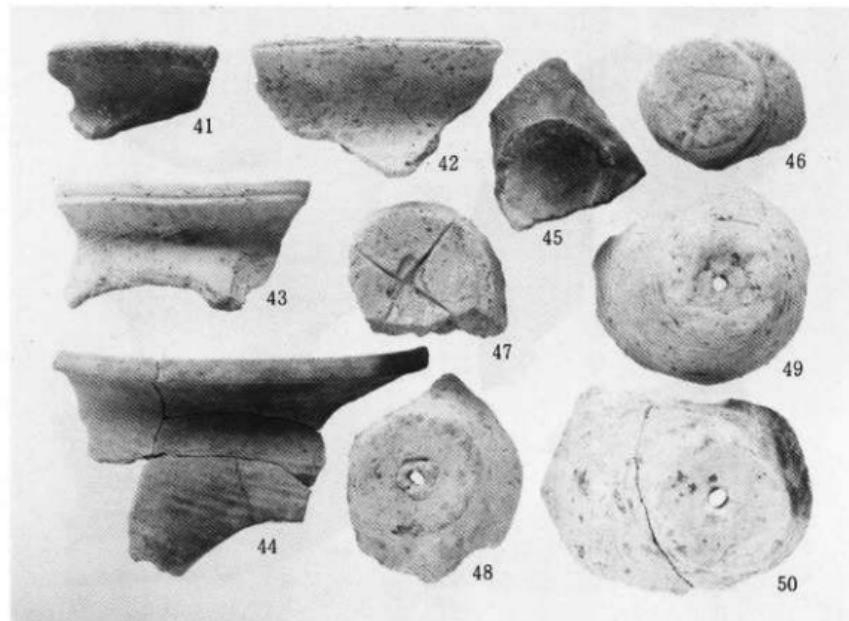


a. 5-J・K地区 井戸(21~26) 柱穴(27~30)



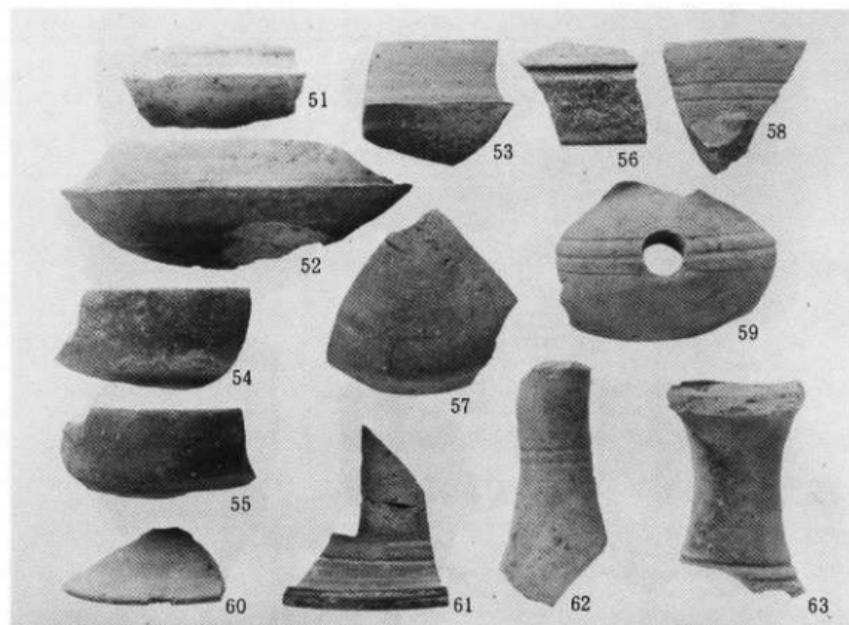
b. 5-J・K地区 溝1(31~38・40) 落ち込み(39)

約1/2



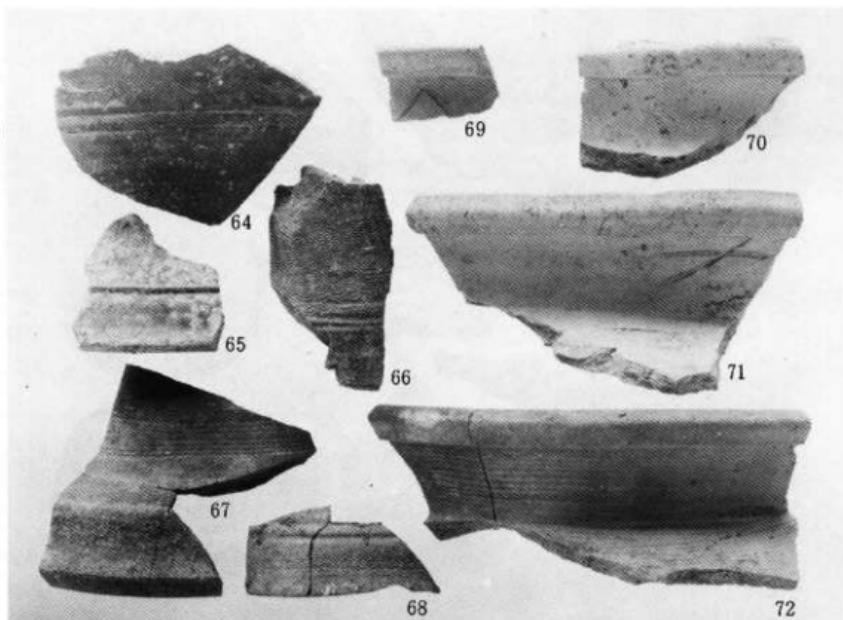
a. 5-J-K地区 溝1(41~48), 包含層(49・50)

約 $\frac{1}{2}$



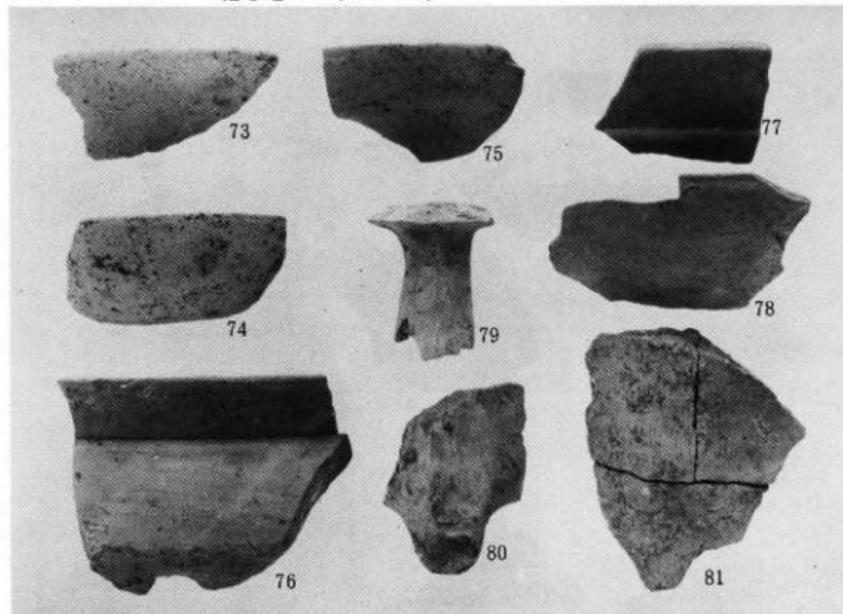
b. 5-J-K地区 包含層(51・52・54・55・60・61), 溝1(53・56・58)
落ち込み1(57・59・62・63)

約 $\frac{1}{2}$



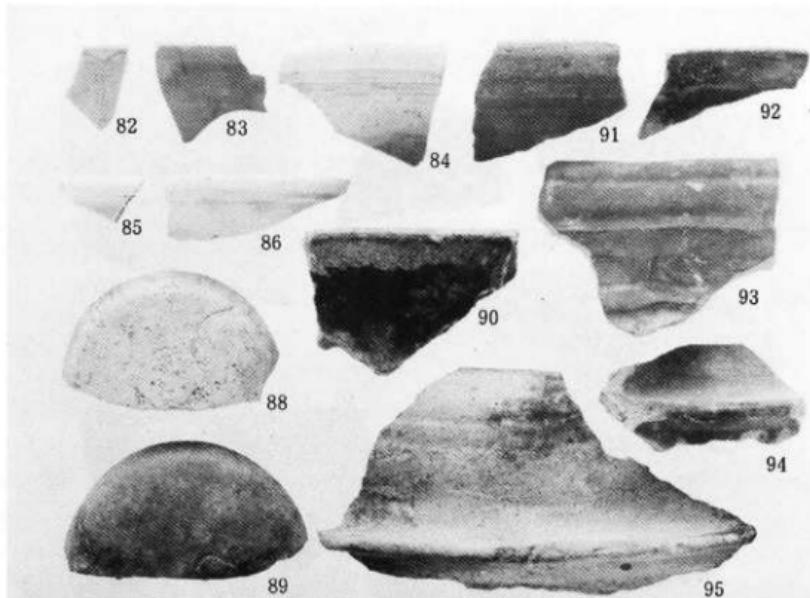
a. 5 - J・K 地区 包含層(64・68・69), 柱穴(65), 溝 1 (66・67)
落ち込み 1 (70 ~ 72)

約 $\frac{1}{2}$



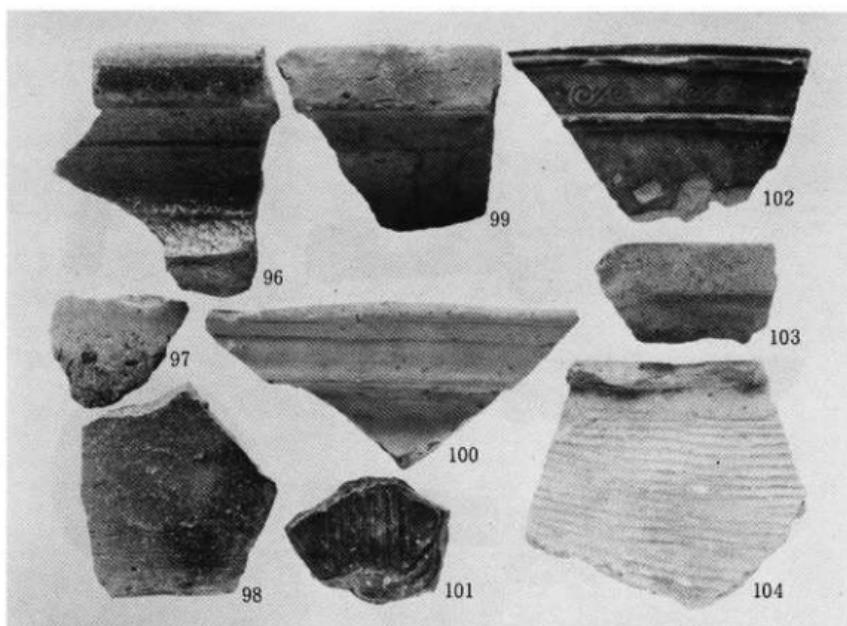
b. 5 - J・K 地区 落ち込み 1 (73 ~ 76・78・81), 溝 3 (77), 柱穴 (79)
井戸 (80)

約 $\frac{1}{2}$

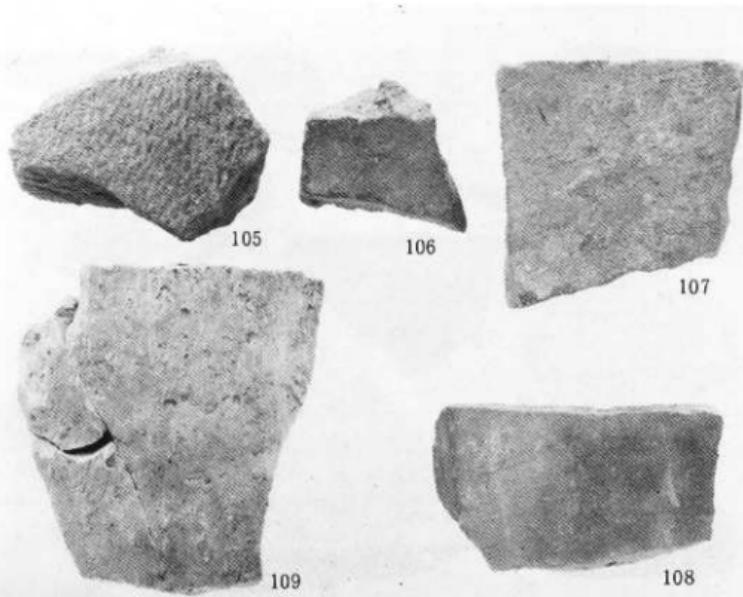


a. 5-J-K地区 柱穴(82~92),溝1(94),井戸(93・95)

約 $\frac{1}{2}$

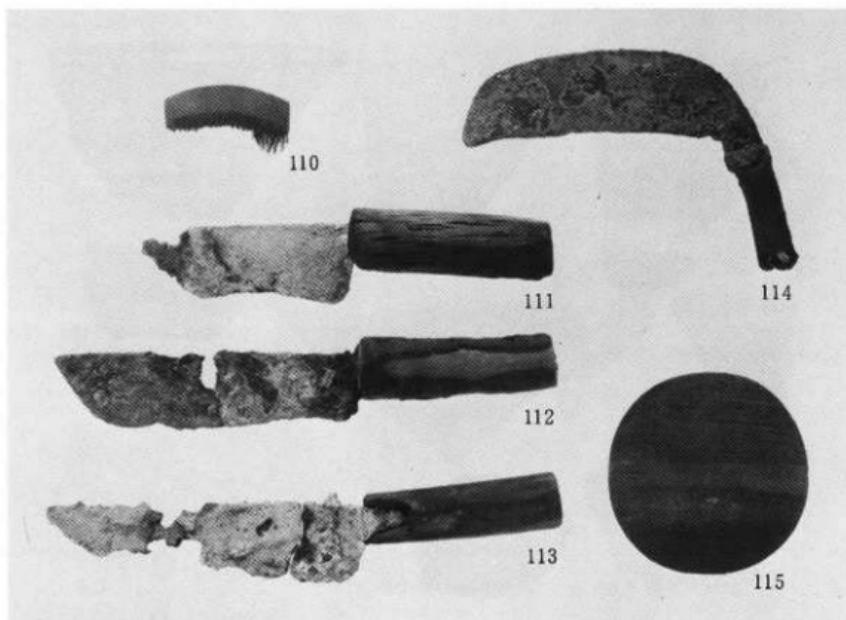


b. 5-J-K地区 落ち込み2(96~98・100・103),井戸(99・101・102・104) 約 $\frac{1}{2}$



a. 5-J・K地区 包含層(109), 井戸(105~108)

約 $\frac{1}{2}$



b. 5-J・K地区 井戸(110~115)

約 $\frac{1}{2}$



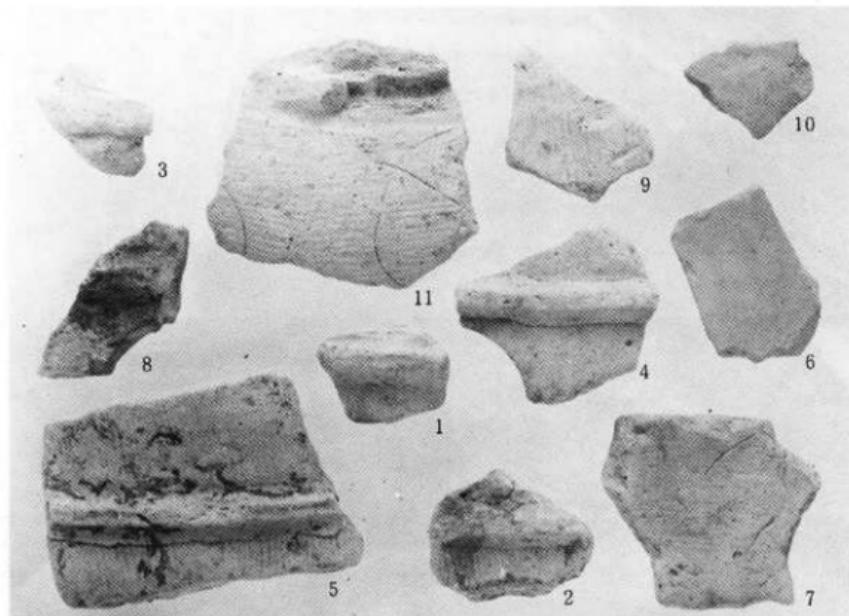
a. 55-I・M地区調査区東半分（北側から）



b. 55-I・M地区調査区西半分（北側から）

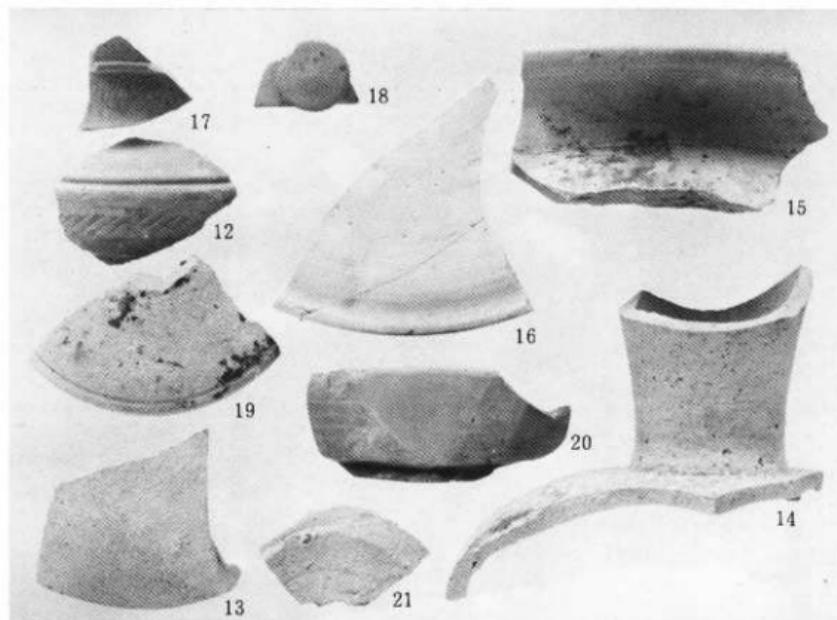


a. 55-I・M地区 溝2(南側から)



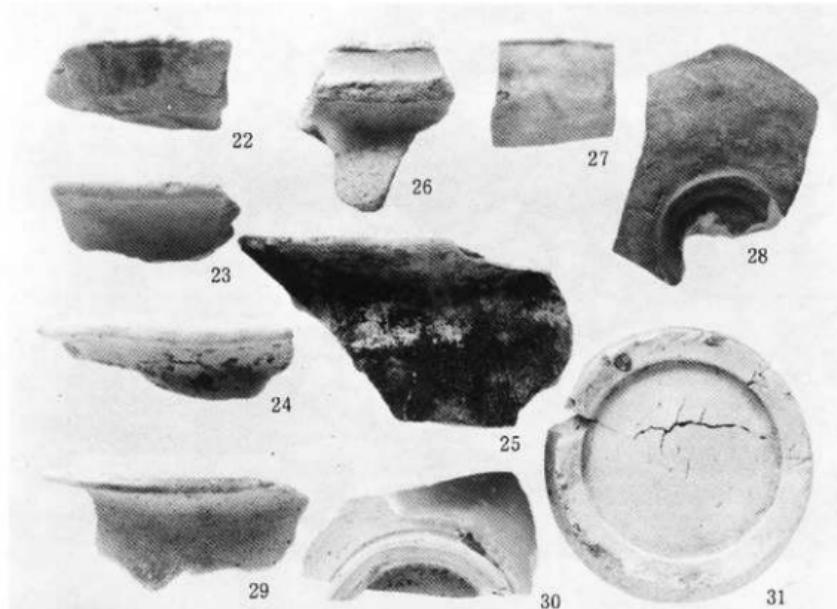
b. 55-I・M地区 溝1(1・2), 溝2(3~7), 黄褐色土(8~11)

約1/2



a. 55 - I・M 地区 溝 2 (12~16), 黄褐色土 (17~21)

約 $\frac{1}{2}$



b. 55 - I・M 地区 溝 2 (22~26), 土壙 (27・28), 黄褐色土 (29~31)

約 $\frac{1}{2}$



a. 4-C・D・G・H地区 西トレンチ（南側から）



b. 4-C・D・G・H地区 北トレンチ（北側から）



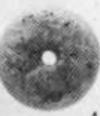
1



2



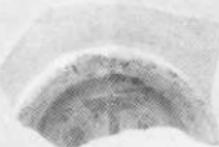
3



4



5



6

a. 44-D・H, 45-A・E地区 旧水路跡(1・2・6), 17-F・G・J地区 包含層(3)
5-J・K地区出土の遺物(5), フラワーセンター用地出土の遺物(4)



7



8



9



10



11



12



13



14

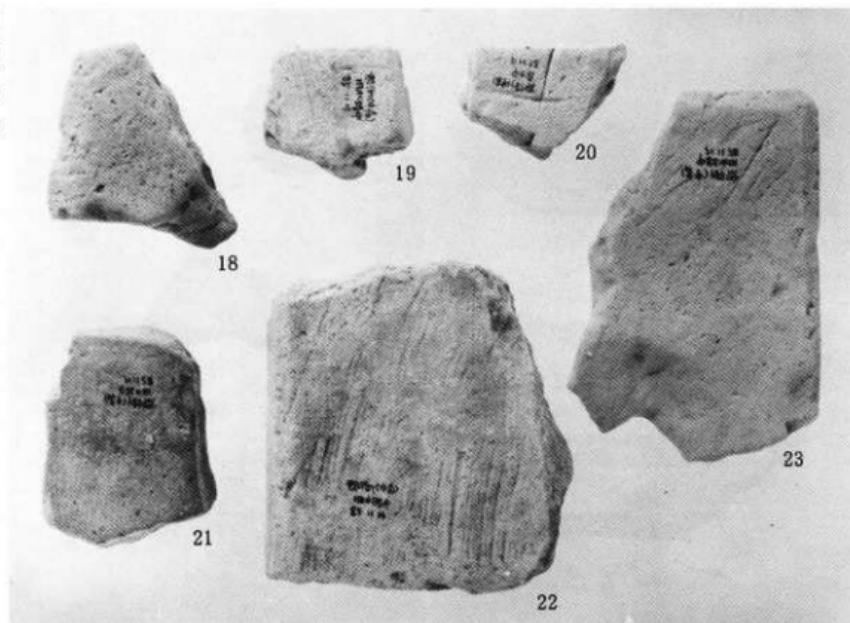


15



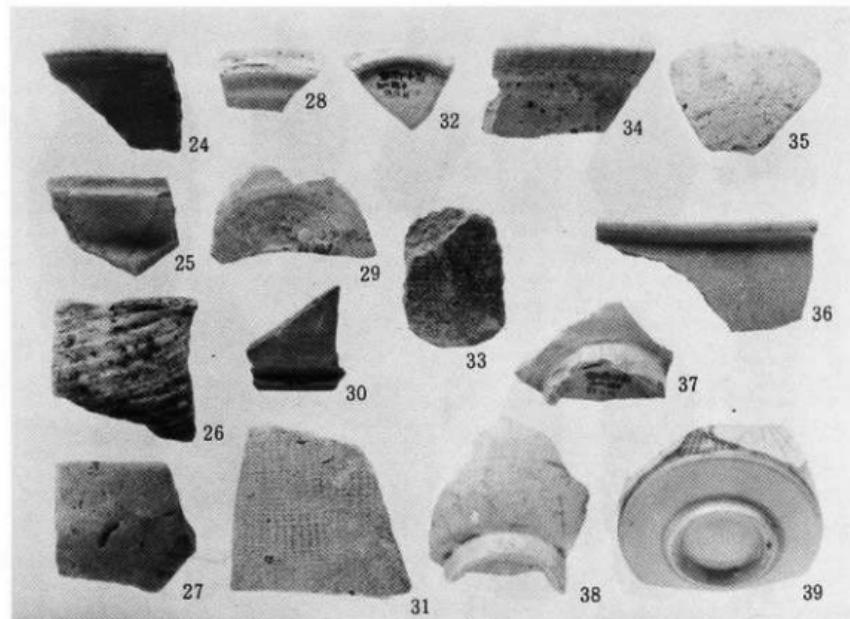
16

b. 鳥上郡衙跡出土の石器 5-J・K地区 溝1(7), 55-I・B地区 包含層(9~12) 約 $\frac{1}{4}$
フラワーセンター用地(8・14・15), 44-D・H, 45-A・E地区(13・16・17)



a. 44-D・H, 45-A・E地区 旧水路跡(18~23)

約 $\frac{1}{2}$



b. 44-D・H, 45-A・E地区 旧水路跡(24~39)

約 $\frac{1}{2}$



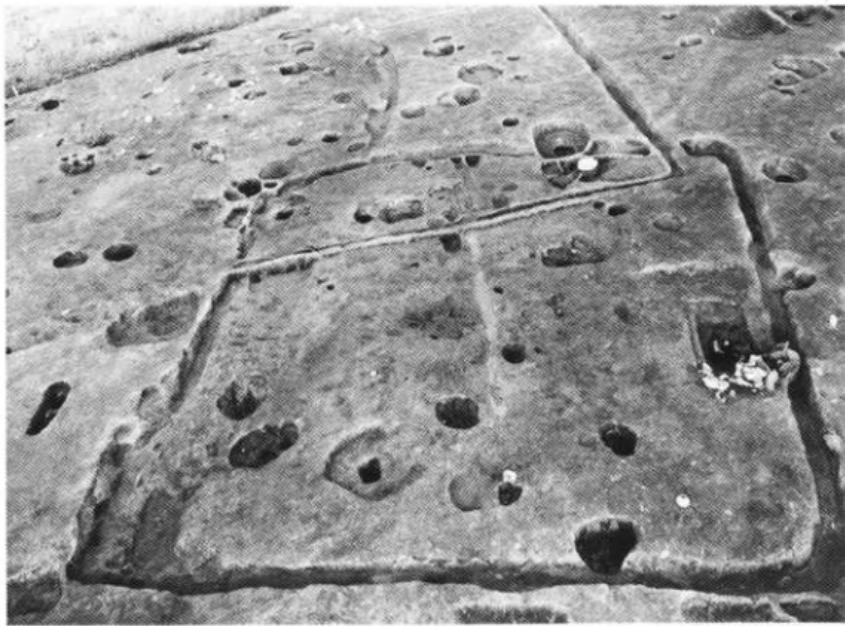
a. 17-F・G・J 地区全景（西側から）



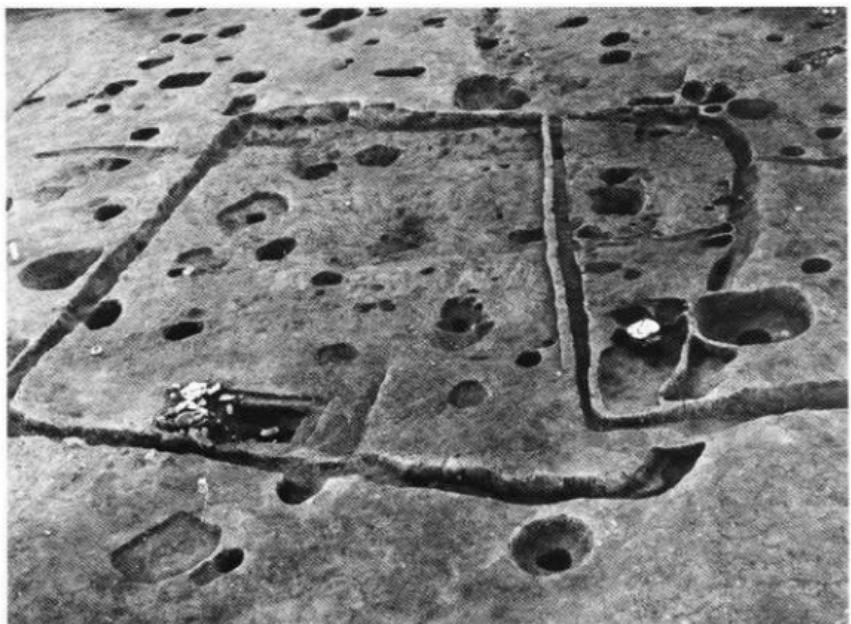
b. 17-F・G・J 地区全景（東側から）



a. 17-F・G・J地区 1号住居跡（南側から）



b. 17-F・G・J地区 2・3号住居跡（南側から）



a. 17-F・G・J地区 3号住居跡（東側から）



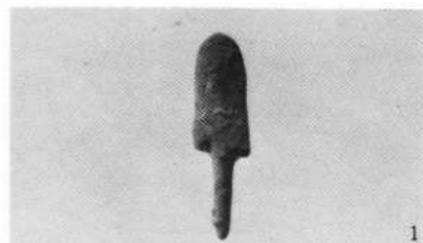
b. 17-F・G・J地区 3号住居跡（貼り床・土器除去後、東側から）



a. 17-F・G・J地区 2号住居跡内集石ビット（東側から）



b. 17-F・G・J地区 2号住居跡内集石ビット(石除去後、東側から)



17 - F・G・J 地区 3号住居跡(2・3), 6号住居跡(1), 暗褐色土(4~7)



8



14



9



15



10



16



12

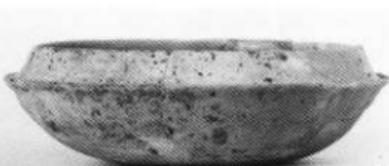


17

17 - F • G • J 地区 2号住居跡(8), 暗褐色土(9~14・17), 土壌1(15・16)



18



20



21

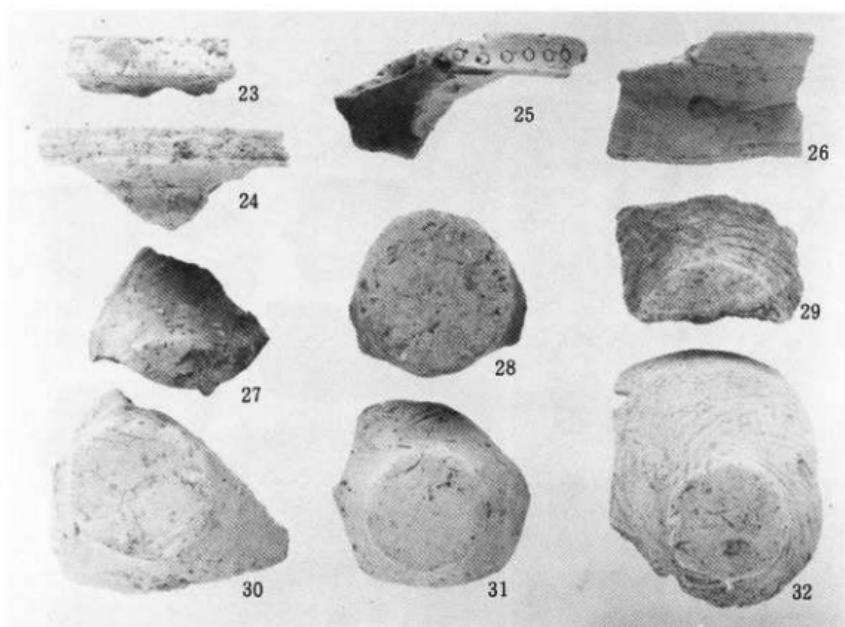


19



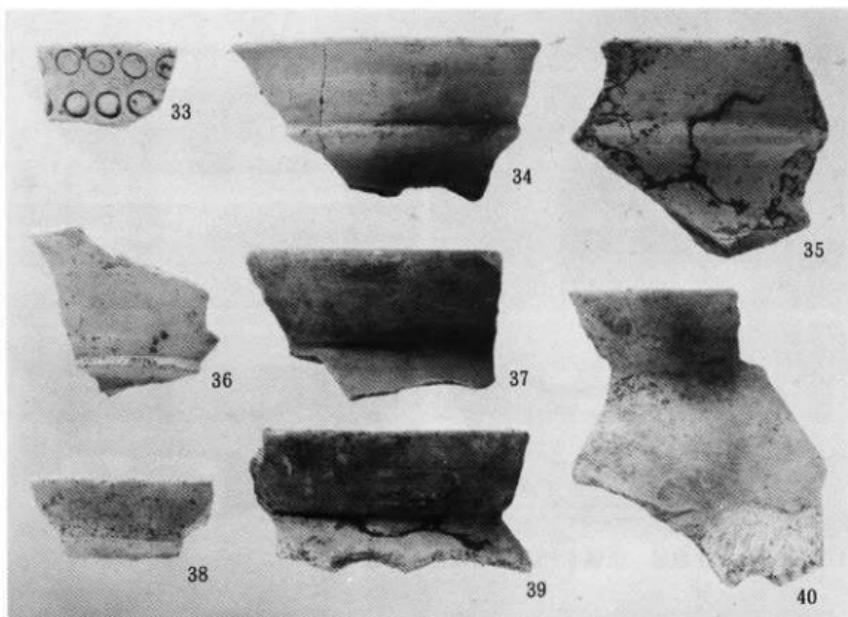
22

17 - F・G・J地区 土壌6(23), 暗褐色土(18~21)



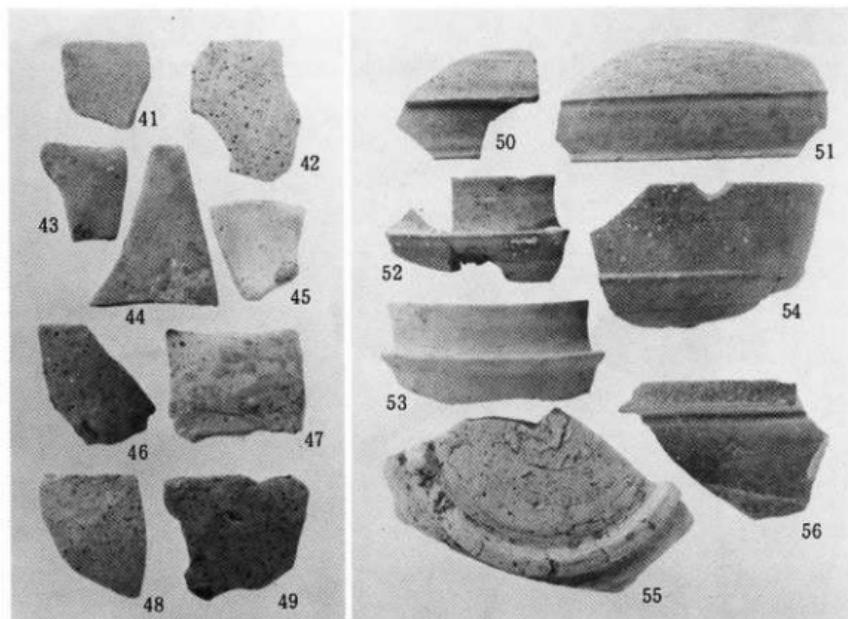
17 - F・G・J地区 暗褐色土(23~32)

約 $\frac{1}{2}$



a. 17-F・G・J 地区 暗褐色土 (33~40)

約 $\frac{1}{2}$

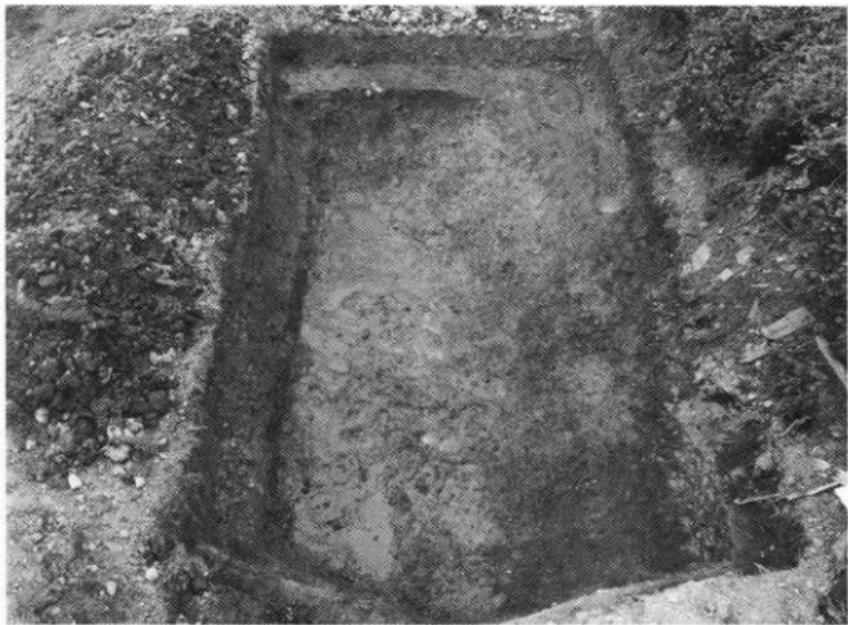


b. 17-F・G・J 地区 暗褐色土 (41~56)

約 $\frac{1}{2}$



鳩上郡衙跡 フラワーセンター用地土壤一括



a. 郡家本町遺跡 A トレンチ（東側から）



b. 宮田遺跡 西調査区全景（北側から）